TURN LAND プログラム

2023 活動記録

もくじ

はじめに ―― P.02 - 03

事業概要 ―― P.04 - 08
TURN LANDプログラム とは？ / 実施体制
事業内容/2023年度の動き/参画施設および団体

TURN LAND

小茂根福祉園 ―― P.10 - 15
気まぐれ八百屋だんだん ―― P.16 - 21
はぁとぴあ原宿 ―― P.22 - 27
ラ・マノ ―― P.28 - 33

プレ LAND

さくらんぼ ―― P.34 - 39
シネマ・チュプキ・タバタ ―― P.40 - 45
フェイト ―― P.46 - 51
ほうらい地域包括支援センター ―― P.52 - 57
くるみの木・みかんの木 ―― P.58 - 63
西荻ふれあいの家 ―― P.64 - 69
ロートこどもみらい財団 ―― P.70 - 75

はじめに

「福祉施設を文化施設に」は、TURN LANDプロジェクトの前身となるTURN事業を監修した現東京藝術大学学長でアーティストの日比野克彦のメッセージの継承だ。「福祉施設」は、これといった何かを大きく変える必要はなく、むしろ「福祉施設を文化施設とみなそう」と文化の側の人たちに向けて放った言葉だった。そして、実際に福祉施設に多くのアーティストを送り込んだ。TURNの真髄の一つはその交流にあった。アーティストたちは、職員や利用者たちの出入りする空間で共に過ごし、関係性を構築し何かを行い、さまざまな気づきを持ち帰った。この交流の部分を継承するため、本事業はアーティストが講師となり利用者を対象として創作活動を行うアトリエ的なプログラムではなく、利用者や職員がアーティストと共に何かをつくりあげるアートプロジェクト型となった。それゆえ施設側にはアーティストを受け入れることだけではなく、このプロジェクトの当事者となる意識が求められた。この手法は指導者と受講者の関係ではなく、どの立場での参加でも新しい体験、学びの場となる活動のあり方を理想とする。TURN LANDプログラムは、そのような場を運営すること。そして、そのような場の意義を自らの言葉で語り、継続的に実施できるようになることを目標に据える。実地演習して初めて理解が及ぶ類の学びだ。本冊子は、2023年度に各施設のチームが我が事として実施し、経験した事柄を言葉にした報告書となる。

あらためて「福祉施設を文化施設に」という言葉に託された事柄とはなんだろう。なにをもって「文化施設」というのか。この大きな問いが頭を占拠した途端、協議の場は硬直してしまう。文化施設として想起される美術館・博物館、ホール、劇場と福祉施設は、無縁のように思われてしまうからだろうか。

美術作品を静かに鑑賞する場所、もしくは騒がしい人お断りの印象の強い劇場やホールをイメージしたら、支援を必要とする人と支援者とが営む場が文化施設なんて「ありえない」と考えてしまうだろう。しかし、文化施設の一つである博物館の定義は2022年「国際博物館会議」（International Council of Museums：ICOM）プラハ大会にて更新され、定義文には次の文章が続く。

「博物館は一般に公開され、誰もが利用でき、包摂的であって、多様性と持続可能性を育む。倫理的かつ専門性をもってコミュニケーションを図り、コミュニティの参加とともに博物館は活動し、教育、愉しみ、省察と知識共有のためのさまざまな経験を提供する。」この加筆されたタスクをもって、社会に参加すると宣言したのだ。

一方、「福祉」の世界では、地域の中にさまざまな人がいるありようがノーマルであるとするノーマライゼーションの考え方を半世紀以上前から提唱してきた。さまざまな人とは、乳飲み子、高齢者、障害者などさまざまな支援を必要とする人たちのことだ。そしてSDGsが提唱され「誰ひとり取り残さない。(No one will be left behind)」とより包括的な概念に上書きされた。

文化の側から見た福祉の現場は、そのありようの先駆的事例の宝庫に映る。とはいえ双方が「初めまして」から始まるTURN的な交流の試みは、双方の戸惑いから始まる。文化側は「福祉」を、福祉側は「アート」を理解しようと歩み寄ることから始まり、そのプロセスこそがプロジェクトとなる。双方の文化が交わって進行するインタラクティブでインクルーシブな手法は、アートと支援、両方の概念を拡張し更新するのではないか。そのように思い期待したい。

そして、昨今ではこのような現場の推進に「ウェルビーイング」という言葉が使われる。東京都は2030年の共生社会の実現をめどに多数の文化的施策を展開している。本事業もその一つとなる。「文化施設」のアクセシビリティの向上も、情報、鑑賞、参画の３つのフェイズで推進している。

TURN LANDプログラムの取組は、それらにつながるリサーチと実践の場としてとてもクリエイティブなものだ。文化が多様な人々の居場所をつくる。知見が蓄積されて人が集い活動する場所は「文化施設」としての側面を持つ。そこに何を見出し価値とするのか。その価値と意義を「福祉」としてではなく「文化」として語るほどのことだったことを本書は気づかせてくれるだろう。

森 司（アーツカウンシル東京）

TURN LANDプログラムとは?

さまざまな「違い」を超えて
多様な人々と魅力的な日常を創る

TURN LANDプログラムは、福祉施設や社会的支援を行う団体がアーティストと共にアートプロジェクト（多様な価値観や特性への理解を深めながら、より魅力的な文化活動を日常の中に生み出すこと）を企画し、実践するプログラムです。プロジェクトの実践を通して、地域との新しい関係性を構築することや、プロジェクトによる気づきを内外に伝え共有することを目指します。

※本事業は、東京2020オリンピック・パラリンピックの文化プログラムを先導する東京都のリーディングプロジェクトの一つとして2015年に始動した TURN事業（令和3年度終了）を前身に、それまでに育まれてきた施設や団体等との関係性や活動をつなぎ、展開しています。

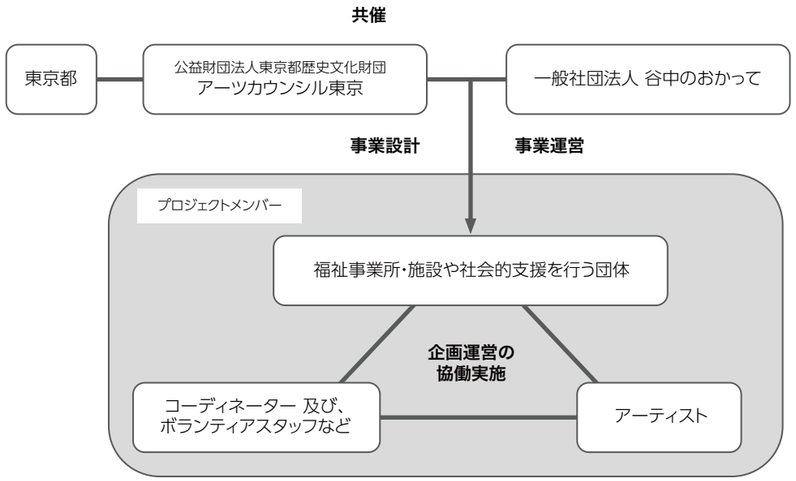
TURN公式ウェブサイト：https://turn-project.com/

プレ LAND — ほうらい地域包括支援センター
「バラエティ・ポコペン」

実施体制

実施プロセスにはコーディネーターが伴走し、事務局との連絡調整やアーティストとのコミュニケーションおよび現場のファシリテーションなど、現場の状況に応じて運営をサポートします。

TURN LANDプログラム　体制図



事業内容

年間を通して、プログラム実践と学び合いの場を展開します。
また、プロジェクトを実施する上で「違い」を力に変えていくために
プログラムの実施と並走して、施設・団体同士が情報共有するための場を開きます。

プログラム実践　×　ネットワーク醸成

TURN LAND
プレLAND

TURN LANDミーティング
年２回

TURN LAND

福祉施設や社会的支援を行う団体がアーティストと共にアートプロジェクトを実践します。継続的に活動できるよう運営体制づくりに重点を置きながら、地域や協力者などが参画できる場の運営を目指します。

プレLAND

福祉施設や社会的支援を行う団体がTURN LANDに取り組む準備段階として、アーティストやコーディネーターと共にアートプログラムを体験します。その経験を通じて、それぞれの現場に合った運営方法やプロジェクト内容を思索する機会をつくります。

ネットワーク醸成

本事業における参画施設・団体の職員および関係者が集い、活動についての相談や情報交換のできる TURN LANDミーティングを開きます。

広報

TURN LANDプログラム公式ウェブサイト（https://turn-land-program.com/）を活用し、動画や各プロジェクトの紹介記事などを通じて事業に関する広報を行い、経験による知を多くの人々と共有します。

8月に開催したTURN LANDミーティングの様子

PROCESS

2023年度の動き

TURN LANDプロジェクト

計11のプロジェクトを実施しました。5月から月ごとに定期開催するものや、10月から本格始動するものなどプロジェクトごとに実施時期や頻度は異なりますが、今年度は振り返りや情報共有の場を意識的に取り入れ、本番の規模やインパクトよりも関わる人々の能動的な意見・気づきを分かち合いながら進めることに重きを置きました。

今年のプロジェクトメンバーが決定しビジョンが見えてきた8月と、全てのプロジェクトが終了した3月に、TURN LANDミーティングを行いました。参画施設の担当職員とアーティストが集い、互いの活動について知る機会となるだけでなく、本事業を主催する東京都やアーツカウンシル東京の担当者と意見交換ができたことは現場を運営するメンバーにとっても有意義でした。

プロジェクトメンバーと出会う

「小さな本番」でイメージ共有

「大きな本番」で新たな関係をつくる

活動を振り返る

4月

5月

6月

7月

8月

9月

10月

11月

12月

1月

2月

3月

第一回TURN LANDミーティング

第二回TURN LANDミーティング

プロジェクトメンバーと出会う（4月～8月）

2023年度は、はじめにトークツリーワークショップなどを通じて、これまでの活動を振り返ることから始めました。参画施設の職員の言葉でこれまでの経験を振り返ることによって、プロジェクトの意義や理想像について考える機会となり、職員がより主体的にプロジェクトの舵取りに参加できるようになりました。また、この活動が誰にとってどんな価値があるのかをみんなで考えることで、答えやゴールが一つではないこと、自分の愉しみをプロジェクトに持ち込んでいいこと、言葉にしきれない思いがあることなどを発言し合える大切な機会となりました。また、アートのプロジェクトは、「理想」を掲げたり「課題」を解決しようとする考え方だけではなく、「魅力」を分かち合う経験をつくることで社会を変えていこうとする考え方があることを学びました。運営メンバーとして協働する職員とアーティストと事務局、一人一人が「感じていること」を表現し合える関係をつくるためには、それぞれの立場や仕事を知ることに加え、考え方に「違い」があり「理解できないこともあること」を共有することが必要でした。

「小さな本番」でイメージ共有（7月～11月）

アートのプロジェクトは、アーティストをはじめ、価値観が異なる人との協働を前提としています。その場合、互いを頭で理解する機会を増やすよりも、協働する経験を繰り返すことが互いを知る一番の近道です。そのためにまず、「小さな本番」を企画することから始めました。職員向けのプログラムや交流会、企画検討会、リハーサルなどを計画することで、一人一人の安心・安全を守りながら新しい挑戦ができる環境づくりを心がけました。予定調和の分かりやすいゴールを目指すというよりは、その場に立ち会う一人一人に新鮮な体験や気づきをもたらすその「状況」をデザインすることを理想としました。また、障害者を含む多様な人々がこのプロセスに参加するためには、本番だけでなくそのプロセス全てに通訳や介助サポートをはじめとする合理的配慮が必要になります。通常の文化施設では本番にそういったサポートをつけることしかできませんが、障害者が日々出入りする福祉施設で実施をするこの事業では、障害特性を理解した職員が沢山いる場で利用者の反応を見ながらプログラム自体を一緒に練り上げることができます。アーティストや文化関係者にとって大変貴重な学びの場であると同時に、普段さまざまな理由で文化施設に行けない職員や利用者にとっても、安心できる環境で新鮮な出会いや経験に一歩踏み出せる貴重な機会となりました。

「大きな本番」で新たな関係をつくる（10月～2月）

プログラムのゲストや参加者、ボランティアスタッフなど、さまざまなかたちで地域の方や近隣の施設にお世話になりながらプロジェクトの山場となる本番を迎えます。今年度はなかなか言葉にし難いプロジェクトの意義や内容を主体的に自分の言葉で語る機会として、参加協力の依頼時に必要な資料や動画などは施設職員がつくりました。その甲斐あって、地域の方や近隣の施設との連携が叶った事例も多く、合計20箇所以上の福祉施設および社会的支援を行う団体の方に参加・協力していただきました。

活動を振り返る（1 月～3月）

本番の後には振り返りの会と合わせて、今年度の活動の重要な点について言葉にしてもらうためプロジェクトに参加したメンバー全員にアンケートを実施しました。アートの現場では評価基準も一つではないので、関係者一人一人がその場の価値を自覚し言葉にすることが重要になります。この冊子には、アンケートから抜粋したものを掲載しました。また、職員へのインタビューも実施し、そのコメントが入った記録動画をウェブサイトで公開したことで、このプロジェクトの価値は参画施設だけのものではないことも自覚する機会となりました。

2023 年度
参画施設および団体

板橋区立 小茂根福祉園
住み慣れた地域での私らしい暮らしを支援する知的障害のある方の通所施設。

気まぐれ八百屋だんだん
八百屋や寺子屋、こども食堂をはじめ、みんなの居場所と出番をつくり出す、
民間型の文化センター。

渋谷区障害者福祉センター はぁとぴあ原宿
知的障害者・身体障害者を対象とする入所支援、通所の生活介護や児童発達支援など
を行う福祉施設。

クラフト工房La Mano（ラ・マノ）
障害のある方が手仕事の物づくりを担う染織とアートの工房。

豊島区立心身障害者福祉ホームさくらんぼ
心身障害者の自立助長のための日常生活の援護、支援を行う施設。

CINEMA Chupki TABATA（シネマ・チュプキ・タバタ）
目の不自由な人、耳の不自由な人、車いすの人、子育て中の人をはじめ、
広く一般の人にひらくユニバーサルシアター。

放課後等デイサービス　フェイト
小・中・高校生で発達について支援が必要なこどもを対象に、
学習支援や居場所づくりなどのサービスを提供している施設。

ほうらい地域包括支援センター
地域の高齢者やそのご家族、認知症の方などを対象とする地域包括支援センター。

放課後等デイサービス　くるみの木・みかんの木
知的障害児・肢体不自由児を対象に、日常生活訓練や集団での療育を行っている施設。

西荻ふれあいの家
“人と人をつなぎながら地域に根ざした福祉の街づくり”を目指す、
高齢者在宅サービスセンター。

ロートこどもみらい財団
こどもたちが自分らしさを探求できるオンラインコミュニティなどの
「居場所」を提供している財団。

TURN LAND

小茂根福祉園

参画施設・団体

板橋区立 小茂根福祉園

小茂根福祉園は、東京都板橋区にある知的に障害のある方の通所施設。生活介護サービスと就労継続支援B型サービスがある。一人一人がかけがえのない個性豊かな社会の一員として「私らしく」住み慣れた板橋の地で、普通の暮らしができることを実現している。
自分のやりたいことにチャレンジしたり、さまざまな人との関わりを通して人とのつながりを感じたりすることで、豊かな人生をおくれるよう支援している。

プロジェクトについて

プロジェクト名

散歩道中 - トトトポ - 「風の通り道」

ねらい 1

障害のある方とあまり関わったことのない人が利用者の自然な姿と出会い共に時間を過ごせる機会をつくりたい。

小茂根福祉園 職員

ねらい 2

施設の外でプログラムをしたい。

大西 健太郎（アーティスト）

プロジェクト運営メンバー

大西 健太郎 (アーティスト)
馬場 葵、會田 郁朗、佐藤 雄介、茂木 まどか (小茂根福祉園 職員)
笹 萌恵 (コーディネーター)
渡邉 梨恵子 (TURN LANDプログラム 事務局)

世界観を一緒に生きてみる散歩プログラム

小茂根福祉園は、２０１６年から大西とのアートプログラムを継続的に実施してきた経験があり、今年度はその変遷を運営面とプログラムの成果を見比べながら園長と職員みんなで振り返るところから始まった。経験値が増えたことで、直接関わったことのある職員たちがプロジェクトの意義を語る言葉も豊富になってきており、今年度の挑戦目標と運営面での懸念を具体的に話し合える状況がつくれていた。そのため、しっかりと狙いを持って職員がプロジェクトを先導することができた。また、外部のコーディネーターが入ったことでアーティストと職員の距離も取りやすくなり、アーティストがプログラムの内容に集中できていた。運営体制に余裕ができたため、利用者がリラックスした状態で活動に参加し活動内容にも意見するような場面を引き出せた。リハーサルを繰り返しながら内容をみんなで検討するプロセスを丁寧につくりだすことができた。小さな本番を重ね、イメージ共有をすることで、「外部の人が参加しやすく、利用者ものびのび参加でき、アーティストも新しいことに挑戦できるプログラムとは何か」を探究する場ができ、初めて参加する人もベテランの関係者も共に新しい気づきと出会える機会となっていた。

PROCESS プロジェクトの動き

POINT
- 利用者も企画に対して意見が言える関係づくり。
- 職員全員とプロジェクト内容を共有する工夫。

6/1 顔合わせと現状共有
（職員、事務局）

6/20 企画構想のための振り返り
（アーティスト、コーディネーター、職員、事務局）

7/24 企画会議
（コーディネーター、職員、事務局）

8/14 企画会議
（アーティスト、コーディネーター、職員、事務局）

9/7 情報共有会
（アーティスト、コーディネーター、事務局）

9/7 企画会議
（アーティスト、コーディネーター、職員、事務局）

9/12 実施検討会
（アーティスト、コーディネーター、職員、事務局）

9/27 情報共有会
（アーティスト、コーディネーター、事務局）

10/13 企画会議
（アーティスト、コーディネーター、職員、事務局）

10/18 散歩プログラム：職員向け

11/18 運営会議
（コーディネーター、職員、事務局）

11/22 運営会議
（アーティスト、コーディネーター、職員、事務局）

12/7 散歩プログラム：一般参加向け

6月 ▶ 7月 ▶ 8月 ▶ 9月 ▶ 10月 ▶ 11月 ▶ 12月 ▶

企画構想のための振り返りの様子。小茂根福祉園からは園長、TURN LAND プログラムを担当してきた職員、新しい職員など、さまざまな立場の職員が参加した。

課題に感じていることや、施設の年間スケジュールも考慮したプログラム実施時期、対象の設定など継続実施を視野に入れ、アーティストとの相談事項を整理していくコーディネーターと職員。

職員：アーティストの要望も聞きつつ園の負担にならないプロジェクトにするにはどうしたらいいかな？

職員：実際に外に出てイメージ共有をしよう！どんな工夫をすれば利用者は意思をみんなに伝えられるだろう？ by 大西

職員：利用者の自然な姿を観てもらいたいな。

これまでのプロジェクトについて説明する大西。

大西が、利用者の魅力を活かした散歩形式のプログラムを提案。どう形にしていくか、活動の頻度や規模感などプロジェクトの設計をしていく。

職員からも利用者の魅力が参加者に伝わるプログラムにするにはどうしたら良いか、さまざまな提案が出てきた。企画検討を重ね、本番までのプロセスが見えてきた。

職員が散歩を先導する利用者の組み合わせを考え、試験的に散歩を実施してみることに。

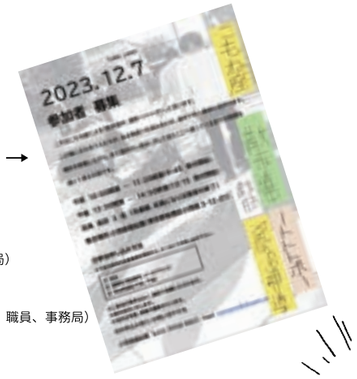
散歩の先導を利用者に頼む大西。

道端に落ちている木の枝や小石も散歩を楽しむきっかけになるかも？

いつも通る散歩道を利用者に尋ねながら公園の中を進んでいく。

次に向けて、プロジェクトメンバーで感想や意見を交換。

職員が作成した参加者募集のチラシ →



施設職員対象のテストプログラム

職員：ここに参加していない職員とイメージ共有をするために動画をつくろうかな。

大西が書いた戯曲を読み合わせてから散歩に出かける。

利用者の先導で散歩に出発。

途中で休憩もできるように、折りたたみ式の椅子も持っていく。

どちらに進むかはその都度相談。

職員：やればやるほど「もっとこうしたい」ってアイデアが出てくるな。

テストプログラムを体験して

先導役の利用者の状況や状態などによって、外に散歩に出かけないパターンも考えられるため、その場合の過ごし方なども検討。

散歩プログラム：一般参加向け

職員：もっともっと試行錯誤をしながら本番をやりたくなるね。 by 大西

本番用にブラッシュアップされた戯曲が完成。一般の参加者を交えて、読み合わせが始まる。プロジェクトメンバーと参加者が一人ずつ順番に台詞を読んでいく。

途中で足が止まってしまった利用者を励ましながら手を引くもう一人の先導役の利用者。

道中で何かを発見し足を止める場面も。

利用者の先導で散歩が始まる。

公園のひだまりで一休み。再び戯曲を開く。

アーティストと職員が丁寧に練り上げたプログラムの構成や、先導する利用者の組み合わせなどが響き合い、お互いの違いが魅力的に見えてくる、そんなワンシーンが生まれるプログラムになった。

PROFILE

photo: Ayaka Umeda

大西 健太郎　Onishi Kentaro

その場所・ひと・習慣の魅力を発掘し出会う過程を通じて「こころがおどる」風景を舞台にパフォーマンス作品を制作するアーティスト。2016年より板橋区立小茂根福祉園にて他者との共同創作によってつくり出す参加型パフォーマンス〈「お」ダンス プロジェクト〉を展開し、2018年南米エクアドルにて「TURN-LA TOLA」の参加アーティストとして、地域住民と共同パフォーマンス〈El Azabiro de La Tola〉の公演をおこなった。2020年「サインポエム」（手話をもとにした詩の朗読表現）を用いてオンライン上で制作する日本・エクアドル国際パフォーマンスプロジェクト〈サインシンフォニーシッチョイサ-手が語る、サインが響く！静寂が奏でる狂騒の交響曲-〉を公演するなど自分とは異なる身体の特性を持った人々との交流に関心がある。

Member's Comments　メンバーコメント

馬場 葵
小茂根福祉園　職員

ある利用者と台本を読んだ時、二人で読む場面がありました。1行目私が一緒に読もうとすると「(読まなくて)いいから」と言ったため、私は利用者が一人で読みたいのだと思い読むのをやめると、2行目になり、(次どうぞ)と手を振られたので、自身の認識と利用者の認識が違うと気づきました。私は、最初から最後まで一緒に読むことが二人で読むことと認識していましたが、利用者は1行ずつ分けて読むことが一緒に読むことと認識していました。普段の支援でもその人を知れば知るほど、いいこともありますが、このように「この人はこうだから」と決めつけないようにしようとあらためて思いました。

笹 萌恵
コーディネーター

風景の中心に、常に職員さんがいました。
前回は職員という立場での立ち振る舞いが多かったと思いますが、今回は純粋に楽しみ、アーティストの企てを推進する仲間になっていたように見えました。

宮澤 真弥
小茂根福祉園　職員

利用者さんがいい意味で普段と変わらない姿で参加していると感じました。初めましての人ばかりで緊張はあったのかもしれませんが、緊張している様子も感じさせないくらい、好きなように思うままに行動しているように見えました。
常に先頭を歩き空を眺めながら何かを探している利用者さん、なかなか歩きたがらず下り坂は時間がかかったけれど、帰りの上り坂は嘘みたいに早く歩いている利用者さん、歩きたがらない利用者さんのそばについて「行くよ!」と引っ張ってくれる利用者さん、全員の性格が見事に表れている活動だったと感じました。サポートするどころか利用者さんの言動に翻弄されてしまい、面白かったです。

秋葉 輝
小茂根福祉園　職員

利用者の持っている独自の世界観、その片鱗というのを今回のプログラムを通して感じられたのかなと思います。
良くも悪くも考え方は凝り固まっていくと思っています。新しい一面を知ることで考え方を柔らかくらできた方がより良い支援ができるのかなと思いました。

會田 郁朗
小茂根福祉園　職員

障害のある方と触れ合ったことが無い人や理解が浅い方も参加されていたと思う。それでも利用者に対して向き合い、何かを感じ取ろうとする姿勢を感じました。

川北 源
小茂根福祉園　職員

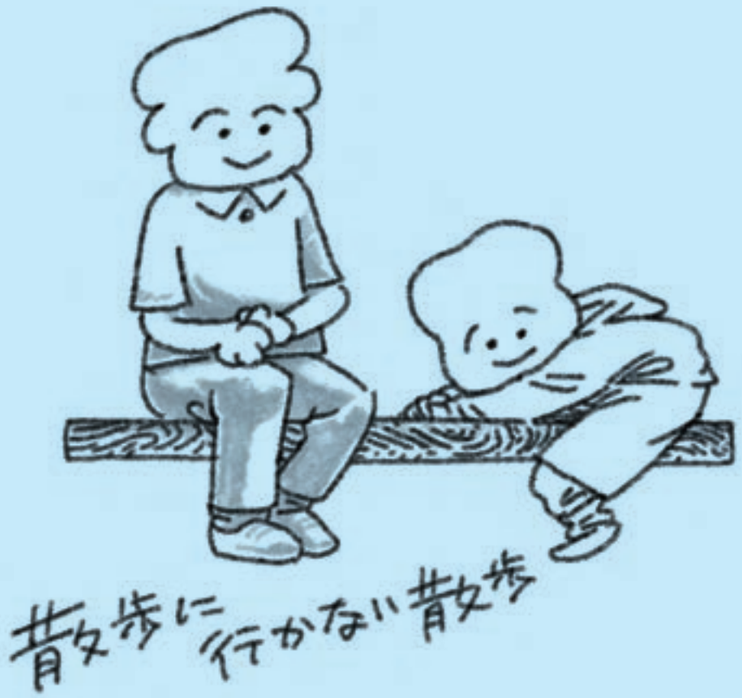
活動が細かに決まっていない内容だったので、利用者の新しい様子を見ることができ、何か普段の支援の中で活かすことができそうだなと学ぶことができました。

大西 健太郎
アーティスト

このプロジェクトは、コミュニケーションの困難や異なる人どうしが場を共にすることの難しさがたくさん詰まった場です。それでもなお人間は一生懸命にものを伝えようとし、お互いの認識がすれ違いそうになっても、今ここを生きようとする瞬間を目の当たりにしました。何故、そうまでして、と思うくらいに。思考し続け、言葉にすることをあきらめず、対話し続けていられるプロジェクトに感謝しています。アーティストとしてかけがえのない場であり、冥利に尽きます。

Comments from the secretariat　事務局コメント

昨年度から引き続き同じ外部コーディネーターに参画してもらったことと、この事業を担当する職員が4名体制になったことで、運営面がとても安定し、一人一人が前向きに取り組めていました。また、同じアーティストで継続的にプロジェクトを実施してきたことで利用者とアーティストとの関係も深まると同時に「職員と利用者」という普段の立場を超えた関係性が醸成され、プログラム内容に対して利用者もほかのプロジェクトメンバーと同等の立場で自分の意見をしっかりと言える状況がつくれていました。



プロジェクトをより詳しく知りたい方は、ウェブサイトも合わせてご覧ください。
プロジェクトの過程や職員のインタビューを含んだ活動紹介動画などを掲載しています。
左記QRコードよりご覧いただけます。
https://turn-land-program.com/case_post/12komonefukushien_2023/

TURN LAND

気まぐれ八百屋だんだん

参画施設・団体

気まぐれ八百屋だんだん
八百屋や寺子屋、こども食堂をはじめ、みんなの居場所と出番をつくり出す、民間型の文化センター。

大田区立池上福祉園
重度の知的障害がある方の、生活の充実と地域での社会的自立を目指す施設。

ステップ夢
アルコール依存症の方を主な対象としてつくられた社会復帰・社会参加の訓練施設。

プロジェクトについて

プロジェクト名 池上わがまま準備室

ねらい 1 障害者やこどもたちが暮らす「地域」の未来をつくるアートプロジェクトは何かできないか。
近藤 博子（気まぐれ八百屋 だんだん 代表）

ねらい 2 自分の意見も言いながらアーティストと一緒に何か活動したい。
澤田 有司（気まぐれ八百屋だんだん 事務局）

ねらい 3 具体的に試行錯誤できる場にしたい。
藤田 龍平（アーティスト）

プロジェクト運営メンバー

青木 亨平、藤田 龍平（アーティスト）
澤田 有司（気まぐれ八百屋だんだん 事務局）
宮﨑 裕司（池上福祉園 施設長）、**金子 航**（池上福祉園 支援主任）
大内 伸一（ステップ夢 施設長）
渡邉 梨恵子（TURN LANDプログラム 事務局）

仲間にアーティストがいる時間をつくってみる

関わる人々の素直な意見を引き出しその場にいる人とそれを分かち合うための時間をつくりたい、という想いが前年度の経験から生まれた共通の動機だった。そこで話し合いから生まれたのが《池上わがまま準備室》というアイデアだ。まずはプロジェクトメンバーのイメージを一つの出来事として具体化させるために「準備室」という集いを毎月1回設けることを決めた。すると、プロジェクトメンバーの気ままな妄想や欲望が自然と絡まり合い、次第に「わがまま」を収集するポストをつくるというアイデアが形になっていった。人々の夢や希望に通じる沢山の可能性を秘めたものとして「わがまま」を歓迎する場をつくる試みである。物づくりのスペシャリストである美術家の青木が、投函する度「わがままだな〜」とか「なるほどー」といった音声が鳴る装置を3Dプリンターとプログラミングを駆使してつくり、そこを補完するような形で澤田が新聞紙でボックス部分をつくった。それと同時に藤田がわがままを記入するためのワークシートをつくり、メンバーの特技を活かしながら一つの作品ができ上がっていった。そして最後に、池上福祉園の職員から「園祭に用務員として参加してほしい」と声がかかり、藤田が以前吐露した、施設の用務員をやってみたいという願いが叶った。園祭では「わがまま記入用紙とわがまま回収ポスト」を設置し、藤田はマイクを持って突撃インタビューをして、訪れた人々から「普段言えない思いの丈」を引き出した。一人一人が自分のビジョンを表現することで開放的な空気感を堪能する機会を実現した。

PROCESS

プロジェクトの動き

POINT

- 近隣の３つの施設が連携して運営。
- アーティストの意思や思想の理解を深めながらみんなで企画をじっくり練り上げる。

5/29 顔合わせと現状共有
（職員、事務局）

7/6 企画構想会議
トークツリー ワークショップ
（職員、事務局）

7/26 現状共有
（アーティスト、事務局）

8/31 企画会議
（アーティスト、職員、事務局）

9/27 池上わがまま準備室 (1)
オンライン相談会
（アーティスト、職員、事務局）

10/20 池上わがまま準備室 (2)
ステップ夢にて利用者との意見交換
（利用者、アーティスト、職員、事務局）

11/10 池上わがまま準備室 (3)
オンライン相談会
（アーティスト、職員、事務局）

11/25 池上わがまま準備室 (4)
池上福祉園の園祭「いけいけハートフルフェスタ」にて実施

12/21 振り返りの会
（アーティスト、職員、事務局）

5月

去年と同じ
アーティストでいきたい！
参画施設一同

トークツリーワークショップを通じて現状と課題を共有。
写真左から池上福祉園 金子、ステップ夢施設長 大内、
池上福祉園施設長 宮崎。右手前がだんだん事務局の澤田。

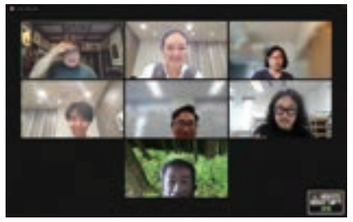
7月

みんなが表現を介して
関われる場は
どうしたらできるだろう。
by 藤田（アーティスト）

アーティストを交えての企画会議。昨年度展開した「自己紹介」を切り口とした活動を発展させ、今年度は「わがまま」をキーワードとしたプロジェクトが始動。プロジェクト名は《池上わがまま準備室》となった。

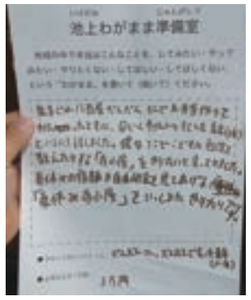
8月

この企画の
プレゼンテーション資料を
あえてビジネス向けの
企画フォーマットで
まとめてみようかな。
池上福祉園施設長



第１回目の《わがまま準備室》の様子。職員とアーティストがそれぞれのアイデアを提案し合った。

池上福祉園の職員が作成した企画プレゼンテーション資料。



アーティストの藤田提案による「わがまま記入用紙」。用紙には、わがままを記入する欄や、実現するために必要なものや予算、手伝ってほしいことや人についての記入欄もある。

池上福祉園の職員が用意した、用務員用のタイムスケジュール。

9月

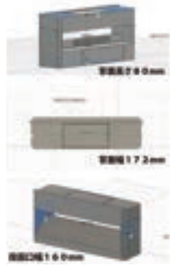
10月

「普段は親がやって
しまうので料理がしたい」
by ステップ夢利用者

これがわがままか〜リアルだな。
by 藤田（アーティスト）

アーティストがステップ夢を訪問。利用者にプロジェクトの説明をし、やってみたいこと・誰かにしてほしいことなど、それぞれの「わがまま」を記入してもらった。

11月



投函する度
何か言葉をしゃべるポストに
しようと思ってます。
青木（アーティスト）

アーティストの青木によるポストの投函口の設計図。

プロジェクトメンバーの澤田が新聞紙でつくった箱に青木作の投函口を設置し、ポストが完成。

12月

言いたいことを言い合っているのに
気まずくなったりしないし、
わがまま言い合っても
場が成立するこういうのって
なかなかないですね。
by 金子（池上福祉園職員）

用務員としてだけではなく
みんなのわがままを
録音してみようかな。
by 藤田（アーティスト）

「あなたのわがままを教えてください」と来場者にインタビューして回る藤田。

池上わがまま準備室　in　いけいけハートフルフェスタ

池上福祉園の園祭「いけいけハートフルフェスタ」に藤田と青木、澤田が「用務員」になりきり参加した。藤田が池上福祉園を見学した際に「用務員として居てみたい」と吐露した「わがまま」が実現した。

肩からかけられる形のポスト。ポストの横には「わがまま」を記入する用紙と鉛筆が用意されている。

それぞれが用務員になりきって振る舞えるように、作業服を着たり、オリジナルのキャップを被ったり、インタビューマイクを持ったりとコスチュームや小道具を用意した。

来場者にも「わがまま」を記入してもらい、投函してもらった。

ポストに集まった「わがまま」を回収する青木と池上福祉園の施設長。

PROFILE

青木 亨平　Aoki Kyohei

何気ない日常生活のなかで物思いにふける時に生じた感覚を伝えるための表現方法を模索している美術作家。向き合う事象に対してじっくりと時間を掛け観察・考察し、さまざまな手法や素材について試行を重ねることで表現したいイメージに近づけていく。微細なニュアンスにまでこだわった丁寧なアプローチによって「物」としての作品をつくり上げる。

藤田 龍平　Fujita Ryuhei

「美術」という言葉や世界、そこに生じる人と作品が織りなす表象を愛おしいものとして大切にしながら多くを学び、「表現」という行為が持つ威力や可能性について探究するアーティスト。表現と身体の関係性や表現とそれが成り立つ形式にも関心が強く、ギャラリーや野外での作品発表、芸能や舞台美術、美術館の教育普及などさまざまな分野で活動しながらコミュニケーション要素の強い独自のパフォーマンスを続けている。

Member's Comments　メンバーコメント

澤田 有司
気まぐれ八百屋だんだん
事務局

池上福祉園の利用者の頑張っている姿を初めてみさせていただき、特に最後の発表会では自然と涙があふれてきてしまいました。こういう利用者たちが、施設内だけの生活にとどまることなく、施設外で活動できる社会を早くつくらなければならないと感じました。
一番大事なことは、アーティストが自分の芸・作品・行動を見せつけたり押し付けたりするのではなく、こもりがちな利用者や施設・空間に穴を開けて外の世界（地域）と空気を一体化させていくことではないでしょうか。お互いが接触できるような刺激・きっかけづくりを、アーティストの感性とテクニックをつかって考えていくことが重要だと思います。

金子 航
池上福祉園　職員

年齢も職業も価値観も経験の幅も人生も異なる人が「必要なこと」について、つながりを前提として価値観を尊重し、話し合いを重ねたことで、異なる文化を超えた価値観・新たな価値を創造することができたのではないかと思っています。物事の社会的価値観にとらわれず、物差しで測らず、お互いの文化を尊重し歩み寄ること、楽しむこと、つくる喜びを共有すること、素直な自分でいいこと、「これ、あったらいいね」とシンプルでいいこと、考えすぎないこと、多くを学びました。

青木 亨平
アーティスト

プロジェクトの一番の成果は顔見知りになれたことだと感じました。参画施設の職員の方たちは、皆それぞれにその場に応じたできることを行っているので、それを尊重しながら無理せず関わっていけたらと思っています。

藤田 龍平
アーティスト

アートという言葉を、「自己紹介」や「わがまま」と言い換えられたことが成果。それによってアーティストが主導する立場だ、という潜在的な意識の構造を転換することに成功したと思う。
また、無理は続かないということと、日々、お互い自分の状況を伝えあえる習慣の再発見が必要なのではないか、ということを学んだ。たとえばハグや握手や相手の目を見る、などの行為は儀礼的な意味だけではなく、お互いの体調や精神的な状態を確認し合う要素がある。そういった観点から、挨拶やミーティングの意義をみなおしてみるのも良いだろうと思っている。これは、プロジェクトを通じてさまざまな施設の日々の運営を見せてもらって学んだことだ。

Comments from the secretariat　事務局コメント

人の心を揺さぶるような血の通った「表現」が存在すると、アートのプログラムは威力を発揮することを実感したプログラムでした。そして、安心・安全が確保できる関係を醸成するにはプロジェクトメンバーがそれぞれに勇気ある投げかけをし合うことが必要なことを実感させられました。また、地域の中の三つの団体が運営メンバーにいることで、それぞれの状況に合わせて柔軟に役割を担い合うことができ、継続的な展開に耐えうる運営母体となっていることを感じました。

プロジェクトをより詳しく知りたい方は、ウェブサイトも合わせてご覧ください。
プロジェクトの過程や職員のインタビューを含んだ活動紹介動画などを掲載しています。
左記QRコードよりご覧いただけます。
https://turn-land-program.com/case_post/13dandan_2023/

TURN LAND

はぁとぴあ原宿

参画施設・団体

渋谷区障害者福祉センター はぁとぴあ原宿

はぁとぴあ原宿は、施設入所支援、生活介護(通所)、短期入所、日中一時支援、児童発達支援などの支援を提供する渋谷区の中核となる障害児者支援施設。生活介護事業では、障害者アート活動への積極的参加と、理学・音楽療法などのリハビリテーション支援に取り組んでいる。また感覚統合とソーシャルスキル訓練を柱とした児童発達支援も行っている。

プロジェクトについて

プロジェクト名　「原宿荒野」と似顔絵と

ねらい 1　より多くの人々とアートプロジェクトの幸福感を分かち合いたい。

はぁとぴあ原宿 職員

ねらい 2　一人一人の感情を飲み込んでくれるような「原宿荒野」に育てたい。

永岡 大輔 (アーティスト)

プロジェクト運営メンバー

永岡 大輔、岩田 とも子 (アーティスト)
頓所 武士、清田 貴史 (はぁとぴあ原宿 職員)
富塚 絵美、関 マイコ (TURN LANDプログラム 事務局)

現れては消える愛おしい出来事を紡ぎ味わうプロジェクト

アーティストの永岡が考案した「原宿荒野」は、はぁとぴあ原宿の屋上を拠点に、荒野のようにさまざまな植物が自生しては消えていくことを繰り返しながら、じっくりとその場に合った何かが育っていく状況を目指し、動き始めた。昨年建てた小屋も夏の強い日照りと雨風が吹きさらす過酷な状況に朽ち、撤去を余儀なくされ、都会のど真ん中にも自然の脅威を間近に感じられる屋上の特性を身に染みるように学ばされる機会となった。その一方で、コロナ禍で先送りになっていた「似顔絵」の野外開催がかない、はぁとぴあ原宿メンバー（利用者）が施設内外の人々と「似顔絵」を通して一人一人と向き合う豊かな時間を持てたり、これまでの活動でできた縁で「バナナの苗」をもらいに行くバスツアーができたりと施設外の人々との緩やかなつながりも生まれた。また、アーティストの岩田をプロジェクトメンバーに迎え、「太陽を近く感じる場所」としての屋上の新たな可能性に、みんなで想いを馳せた実り多き年になった。

PROCESS プロジェクトの動き

POINT
- アーティスト考案のアートプログラムを施設職員が施設の行事で企画し、展開。
- 障害の有無を超えて、人と人が自然に出会えるプログラム。

5/25 顔合わせと現状共有
（職員、事務局）

7/7 企画構想会議
トークツリー ワークショップ
（アーティスト：永岡、職員、事務局）

8/28 実施検討会
バナナの木を見に行く
（職員、事務局）

8/30 企画会議
（アーティスト：永岡、職員、事務局）

9/19 **バナナの苗をはぁとぴあ原宿に運ぶバスツアー**
（アーティスト：永岡、利用者、職員、事務局）

9/21 施設訪問
はぁとぴあ原宿の活動に参加
（アーティスト：岩田、職員、事務局）

10/18 企画会議
（アーティスト：永岡、職員、事務局）

10/21 **はぁとぴあ祭にて「永岡大輔さんとの似顔絵」活動**

11/9 企画会議
（アーティスト：永岡、職員、事務局）

11/13 屋上の「小屋」の撤去
バナナ植え替えについてオンライン相談
（アーティスト：永岡、職員、事務局）

11/15 **バナナの植え替えと岩田の企画会議**
（アーティスト：永岡・岩田、職員、事務局）

12/13 オンライン相談会
（アーティスト：岩田、事務局）

12/20 アーティストによる
プレゼンテーションと意見交換
（アーティスト：永岡・岩田、職員、事務局）

5月 ▶ 7月 ▶ 8月 ▶ 9月 ▶ 10月 ▶ 11月 ▶ 12月 ▶

はぁとぴあ祭で何かやってもらえませんか？
施設長

トークツリーワークショップでは、今年度は職員や地域の人との関わりをより増やしていきたい、という意見が出てきた。

芝浦にあるコミュニティスペース SHIBAURA HOUSE からバナナの株分けをしてもらえることになり、職員が下見に伺った。

バナナの苗をはぁとぴあ原宿に運ぶバスツアー

利用者３名と職員、永岡、スタッフがはぁとぴあ原宿の送迎バスで芝浦からバナナの苗を運んだ。

3メートル近くまで成長していたのでエレベーターに入るか心配だったけれど無事に載せられた！
by 担当職員

はぁとぴあ原宿に着いて、エレベーターで、４階の屋上まで移動する様子。

植物は環境に合わせて適応しようと変化するから熱帯の植物を育ててみるのも面白いと思います。
by 永岡（アーティスト）

はぁとぴあ原宿の屋上に運び込んだバナナの苗を倒れないように固定した。

「永岡大輔さんとの似顔絵」活動

似顔絵が屋外でできる日がついにきましたね！
by 担当職員

はぁとぴあ祭では、施設の正面玄関前に長机と椅子を置き、職員が作成したプラカードを掲示し来場者を迎えた。利用者2名が描き手となり、1名がキーボードを弾いて演奏で盛り上げる。

メンバー（利用者）一人一人の体の大きさに合った永岡特製の椅子。

アクリル板に似顔絵を描く永岡。似顔絵コーナーがあると聞きつけて楽しみにしていたという利用者たちの列ができた。

似顔絵コーナーに設置したプロジェクト紹介パネル。

バナナの植え替え

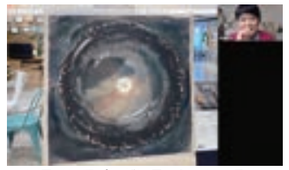
鉢からバナナの苗を取り出し、植え替え準備をする永岡。

防寒のため鉢ごとラップで包み、越冬の準備完了。

永岡が木の板でつくった鉢に植え替え、越冬のため幹の部分を残してカットした。

バナナの苗の植え替えに駆けつけた岩田。

屋上で自然乾燥させて大きな紙をつくるのはどうだろう？
職員



オンラインでプレゼンテーションする岩田。

永岡、岩田、職員と意見交換。

PROFILE

永岡 大輔　Nagaoka Daisuke

横浜と山形を拠点に活動するアーティスト。記憶と身体との関係性を見つめながら、実験的なドローイング作品を制作。
2016年よりTURN事業に参加し、はぁとぴあ原宿には2019年10月から交流を重ね、2022年からはプロジェクト《原宿荒野》を始動。「自生」や「変容」をテーマに植物が根を伸ばし、葉を茂らせるような活動となるようディレクションしている。

岩田 とも子　Iwata Tomoko

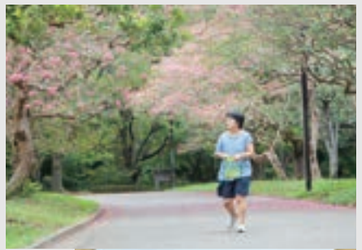
地面や太陽といった誰にとっても身近でありながら宇宙的なサイクルを想像させる事象に注目し制作を続けるアーティスト。自然観察・採集を活動に取り入れ、そこで出会った自然物に対する素朴な視点、そこからはじまる学びと表現を大切にしている。

はぁとぴあ原宿 岩田

もう一つのプロジェクト

「ペースをつくってくれる存在」との出会い

アーティストの岩田は歩くことを仕事とする「歩工房」の活動を見学した際、職員の言葉に驚いた。先頭を走る利用者のことを「ペースメーカー」と表現したからだ。自分とは異なるペースで行動する利用者をペースメーカー、つまり「ペースをつくってくれる人」として大事にする振る舞いに岩田は感銘を受けた。幼い頃から魅了されてきた「太陽」やいつもそばにいる思うようにはならない「幼な子」や毎年やってくる「誕生日」も、もしかしたらペースメーカーかもしれない。そんな気づきから、施設にいる人の「誕生日」や太陽を感じられる場所としての「屋上」にあらためて注目する試みについて職員と面白みを分かち合った。



施設には、「染め」「織」「麦」「紙」「歩（あゆみ）」などの工房があり、利用者がそれぞれの工房で日中活動を行っている。岩田は、午前中「歩」工房の利用者と一緒に代々木公園まで行って活動を見学した。（写真一番左）

散歩の途中で岩田が見つけた植物。

午後は「紙」工房で紙漉き作業を見学・体験した。

紙にローラーをかける作業。利用者と一緒に腕振りをしながら見学する岩田（右）。

プロジェクトをより詳しく知りたい方は、ウェブサイトも合わせてご覧ください。
プロジェクトの過程や職員のインタビューを含んだ活動紹介動画などを掲載しています。
左記QRコードよりご覧いただけます。
https://turn-land-program.com/case_post/14heartpia_2023/

Member's Comments メンバーコメント

清田 貴史
はぁとぴあ原宿 職員

似顔絵プロジェクトは、地域や外部の方の似顔絵を描くにあたって、緊張するのではないかと思っていましたが、普段のペースで接し、穏やかな笑顔がみられたことが印象に残っています。利用者が普段から何気なく取り組んでいることが、他者との関わりの場を持つことで評価され、本人の自信につながっているように感じています。何気なく取り組んでいることは、好きでやっていることだけではない気がするのです。そのことが評価されることで、本人の好きなことに変化することもあるように感じます。でも、好きなことが評価されることが、何よりも嬉しいように思います。

岩田 とも子
アーティスト

施設内でルーティンとして行われている公園までの散歩の様子が印象に残っています。歩く速度が予想以上に速く驚き、施設のスタッフにその理由を尋ねると、先頭を歩く人がペースメーカーとして全体の歩みの速度をつくっていると教えてもらいました。人に「ペースをあわせる」ということはある意味「ペースをつくってもらっている」ということになる。散歩のメンバーによってつくってもらった速度で私も歩いてみたことで周りの景色を瞬発的に切り取るような感覚が面白く感じられました。私たちにとってのルーティンとは何か？という問いを新たに得たことは次の展開にとって大事な気づきになりました。

永岡 大輔
アーティスト

外の人たちと利用者さんとの関わりが生まれたのは非常に嬉しかった。また、初めて小さな遠足のような形でのお出かけを利用者さんとできたのも、彼／彼女らのいつもと違った側面と出会えて良かったです。これまで、施設の外の環境といかに出会えるのかを考えながら実践してきましたが、何か新しいことをすると、乗り越える課題や発見と出会う。当然のことですが、更にこの時に生まれる感情が非常に大きなかせになったりエネルギーになったりすることがとても面白く重要なことだと感じます。この部分をいかに具体的に共有できるかをもう少し突っ込んでみたいと思っています。意図の伝わりにくい提案をしていると思うのですが、職員たちが隠れた部分を理解してくださったり、活動の意図が理解不能でもとりあえず付き合ってくださることが何よりの成果だと思います。本当にすごいことだと思います。

Comments from the secretariat 事務局コメント

さまざまなアートワークショップを実施してきた経験によって、職員もアーティストの手法や特性を理解しているので、企画会議の際もアーティストの提案に対して対等な立場で本質をつくような意見を言い合える関係ができています。また、アーティストたちが、頼りなく曖昧な「魅力の予感」を手放さないことによって、職員や利用者が、１つ１つの出来事を「イベント」として理解し消化するのではなく、「一見何のためにやるのかよく分からないような出来事」にも能動的に向き合い、親身に寄り添いながらみんなで責任を分かち合う態度を習得していることが長年培った成果のように思います。

TURN LAND

ラ・マノ

参画施設・団体

クラフト工房 La Mano（ラ・マノ）

ラ・マノは、町田市の住宅街の里山のような森の中にあり、障害のある方が手仕事の物づくりとアート活動を行っている場所。藍や草木で糸を染めたり、染めた糸を使っての織り、刺しゅうなどのクラフト製品の制作や、小さなアトリエで個々の豊かな表現活動を行っている。

プロジェクトについて

プロジェクト名

ジョニーの アフタヌーンブレイク

ねらい 1

昨年つくった「デッキ」をもっと活用できるようにしたい。

ラ・マノ 職員

ねらい 2

施設の日常の中に、誰もが関われるような余白のある場をつくりたい。

水内 貴英（アーティスト）

プロジェクト運営メンバー

水内 貴英 (アーティスト)
高野 賢二 (ラ・マノ 施設長)、**三澤 稔生**、**齋ジュリア 愛** (ラ・マノ 職員)
富塚 絵美、**関 マイコ** (TURN LAND プログラム 事務局)

誰もが関われる憩いの場を みんなでつくって みんなで楽しむ

ジョニー（アーティストの水内）が昨年度にラ・マノに通ってワークショップをやったりデッキをつくったりした経験を振り返り、昼休みが一番利用者と自然にコミュニケーションがとれたことから、それならと施設長の高野は昼休みを延長してその時間にジョニーとの時間を設ける提案をした。利用者とジョニーが楽しく関われるようにするには職員のサポートや理解が必要なことや、きちんと仕事もしたい利用者の思いや習慣にも配慮しての発案だった。「昼休みを延長する」という発案によって、職員や利用者が日々の活動の延長線上でプログラムをとらえることができ、アートの時間をどう位置付けて良いか分からない気持ちや、自由だからこそ臨機応変な対応を求められる状況に対する心理的な負荷を軽減することができた。昨年度つくったデッキにテーブルを増設してテラスにしたり、ラ・マノの山でとれる木材や竹を活用してコップやタイルをつくったりと、みんなで手を加えながら「できたらここで何する?」と投げかけ合い、想像しながらその場に関わることで、そこに関わった人たちが当事者になっていく状況をつくることができた。ラ・マノの利用者が訪れた人たちにコーヒーを振る舞いながら話しかける様子はとても誇らしげでみんなを励ます力となっていた。

PROCESS

プロジェクトの重かき

POINT

- 昨年つくった「デッキ」を「テラス」に改築。
- 昼休みを延長して無為の時間を追加。

6/8 顔合わせと現状共有
（職員、事務局）

7/25 企画構想会議
トークツリー ワークショップ
（職員、事務局）

8/7 企画会議
（アーティスト、事務局）

8/16 企画会議
（アーティスト、職員、事務局）

9/28 **《ジョニーのアフタヌーンブレイク》**
①竹のコップ作りワークショップ、外部の方を案内

10/26 **《ジョニーのアフタヌーンブレイク》**
②タイルワークショップ

10/30 企画会議
（アーティスト、職員、事務局）

職員が作成したプロジェクトの案内 →

11/14 手すり兼テーブルの制作

11/16 手すり兼テーブルの制作、
コーヒーの淹れ方練習

11/24 コーヒーの淹れ方練習、
タイルづくりワークショップ

12/9 **《ジョニーのアフタヌーンブレイク》**
12/10 **③La Mano 染織展期間中に開催**

6月 ▶ 7月 ▶ 8月 ▶ 9月 ▶ 10月 ▶ 11月 ▶ 12月 ▶

「利用者が
やりたいことを
実現するような
ものにしたい」

トークツリーワークショップの様子。

施設長

昼休みの時間を延長しよう！
そうすれば職員の
気持ち的な負荷も少なく
実施できるかも。

施設長

昼休みの時間が一番
利用者たちと
コミュニケーションが取れる。
（昨年施設に通った経験から）
by 水内

水内（中央）と今年度のプロジェクトの構想を練る。新規職員も加わり、新たな運営体制でスタート。

TURN LAND プログラムをやることで
自分達の施設を
客観的に見る機会になるといい。

施設長

昨年度つくったウッドデッキを活かしたプログラムを検討。日々の業務もあるため、利用者や職員がリラックスして参加するには、昼休みの時間が鍵になることが見えてきた。

施設の農園の管理をしているボランティアのメンバーも参加。

ジョニーのアフタヌーンブレイク
①竹のコップづくりワークショップ

施設の敷地内に自作の旗を掲示する水内　（通称ジョニー）。

敷地内にある竹林の竹を使ってコーヒーカップをつくる。

竹の縁をヤスリがけする利用者。

昼休みになると続々と利用者や職員が集まってきた。

ウッドデッキの使い方について
アイデアを聞く水内。

初めてラ・マノを訪れた外
部の方を案内している様子。

ジョニーのアフタヌーンブレイク
②タイルづくりワークショップ

薄くカットした木に絵や模様を自由に描いてもらい、
タイルのように床に並べていく。

共同作業

ウッドデッキに手すりを設置する水内。その様子を見て、利用者も手伝いに来てくれた。

枝を集めてデッキまで運ぶ。

ラ・マノで送迎を担当していた
方がこどもと一緒に手伝いに来
てくれた。

木漏れ日が心地よいテラスが完成した。

次回の《ジョニーのアフタヌーンブレイク》に向けて、
コーヒーの淹れ方を復習する利用者とそれをサポート
する職員。

ジョニーのアフタヌーンブレイク
③La Mano 染織展期間中に開催

ラ・マノ主催の染織展で、テラスでのコーヒーブレイクを
来場者に味わってもらうことに。利用者の中でも、練習で
ドリップに慣れた方や、コーヒーが大好きな方、コミュニ
ケーションが楽しめそうな方たちが店長 / 店員をつとめ、
来場者にコーヒーを振る舞った。

ここでやってみたいことを来場者にも書いてもらうボード
を設置。たくさんのアイデアが集まった。

ユーカリの木がシンボルとなり、来場者と利用者が交流できる
場も生まれた。

PROFILE

水内 貴英　　Mizuuchi Takahide

通称：ジョニー。芸術祭や福祉施設などを活動の場としながら、関わる場所や状況に呼応する作品を国内外で発表しているアーティスト。使う素材や手法は状況に応じて異なるが、大掛かりな大工仕事のようなものからコミュニケーションをベースとしたイマジネーション重視のワークショップまで数多く手がけている。

Member's Comments　メンバーコメント

齋ジュリア 愛
ラ・マノ 職員

普段屋内での作業が多いため、外に出て開放的な気持ちになった利用者が多かったように思う。セルフドリップコーヒーを初めてやる人が多く、何回かやって上達する人もいればなかなかうまくいかない人もいた。普段お弁当のおかずを残したり、作業で材料を余分に使ってしまう人でも、自分で淹れたコーヒーは苦くても最後まで飲んでいた。

三澤 稔生
ラ・マノ 職員

いつもの静寂の中の「ゆったり」とは違う大勢の人間がつくり出す「ゆったり感」があった。あたりまえに見えている景色も、外の人からみると違う景色にみえるのだろうし、その人たちがいるからこそのいつもの景色を感じることができた。利用者も、外部の人が来るのを楽しみにしていた。

高野 賢二
ラ・マノ 職員

いままで、場所として認知されていなかったユーカリの巨木が、その周りにデッキができ、スペースができたことで、集える場になった。「フラメンコ」や「コーヒーブレイク」など、皆で時間やいろいろな「事」を共有することで、普段の利用者が行う仕事の場とは、異なる雰囲気を持つ場ができつつあると感じている。

朝比奈 益代
ラ・マノ 職員

作業や何かをする目的ではなく、ゆっくりできた。リラックスするために集まると、利用者の別の一面が垣間見える。

水内 貴英
アーティスト

元々の場所の持つ力なのか、人の力なのか、何をしていても気持ちよいと思える現場でした。最後のジョニーのアフタヌーンブレイクで、さまざまな背景をもった、たくさんの人たちが何となく一本の木の周りに集まってくつろいでいる光景がとても美しいものに感じられました。

Comments from the secretariat　事務局コメント

ラ・マノの敷地は広く、山畑の世話をしているボランティアの方も《ジョニーのアフタヌーンブレイク》を一緒に満喫することができました。外部の人たちが対話を楽しみながら作業をすることで当事者になっていく場をジョニーはつくってくれました。ジョニーにやってほしいことが山盛りあって、でもアーティスト頼みの場ではなくみんなで役割を少しずつシェアしている。何より利用者たちはみんなジョニーが来るのを楽しみにしていて、ボランティアの方や職員も信頼しているし「なんか凄い」と思っている。そしてジョニーも「気持ちいいな〜」と言いながら休日のようにのびのび、しかしガシガシ仕事をしてくれる。そんな状況はつくれそうでなかなかつくれません。ただコーヒーを飲むだけでは起きないことが起きていることは明らかでした。

プロジェクトをより詳しく知りたい方は、ウェブサイトも合わせてご覧ください。
プロジェクトの過程や職員のインタビューを含んだ活動紹介動画などを掲載しています。
左記QRコードよりご覧いただけます。
https://turn-land-program.com/case_post/15lamano_2023/

プレLAND

さくらんぼ

参画施設・団体

心身障害者福祉ホーム　さくらんぼ

さくらんぼは、豊島区在住の心身障害のある方が保護者の死亡・高齢化・疾病などの理由で、就労または福祉作業所等への通所が困難となった場合に、住み慣れた地域で生活ができるよう、自立助長のための日常生活の援護、支援を行う施設。

プロジェクトについて

プロジェクト名	ウチュウダンス
ねらい 1	さくらんぼを必要としている人への想像力が広がるような機会をつくりたい。まだ出会っていない地域の方と出会える場について考えたい。 さくらんぼ 職員
ねらい 2	高齢になっても障害があっても踊れる「踊り」の魅力と可能性を知ってもらいたい。 アオキ 裕キ（ダンサー）

プロジェクト運営メンバー

アオキ 裕キ（新人Hソケリッサ！ 代表、ダンサー）
西原 尚（サウンド・アーティスト）
杉田 雪絵、柴田 夏実、高取 さくら（さくらんぼ 職員）
富塚 絵美、関 マイコ（TURN LANDプログラム 事務局）

イメージを全身で表現し合って出会う

池袋駅から歩いて辿り着く心身障害者福祉ホームさくらんぼの職員たちはそれぞれにさまざまな地域への思いを抱えていた。どんなプロジェクトをやることが自分たちにとって有意義なのだろうか。今まで出会っていない人たちに施設を知ってもらうには、何をすべきか。まずは事務局が推薦するダンサーのアオキを招き、多様な人々と関わった今までの活動についてプレゼンテーションしてもらい、一緒に体を動かしながらアオキの手法について学ぶ機会を設けた。職員は実際にアオキのダンスワークショップを体験し、さまざまな可能性を秘めた活動だということは直感的に理解したが、枠にとらわれないなんとも形容し難い活動の内容や意義をどう言葉にし、参加者を募れば良いのか課題も山積みだった。そんな中、少しでもお互いを知る契機をつくるためモルック大会（ガイドヘルパーと利用者のための交流会）にアオキ率いるダンスチーム新人Hソケリッサ!のメンバーやサウンド・アーティストの西原を招き、一緒にモルックをして交流をした。さらに、毎年恒例の「さくらんぼ祭」では観客参加型のパフォーマンスを実施した。少しずつ互いの価値観や懸念などを言葉にできる関係が築かれていった。クリスマスイブに開催したダンスワークショップでは、今までさくらんぼに来たことのない人々も訪れ、障害の有無に関わらずこどもも参加できるような交流の場をつくることに成功した。

PROCESS プロジェクトの動き

POINT

- アーティストが利用者や職員と交流しながらプログラムを開発。
- 職員が事前にプログラムを体験し、アーティストの世界観についての理解を深めてから近隣の人に企画を案内。

6月

6/16 顔合わせと現状共有
（職員、事務局）

6/26 企画構想会議
トークツリー ワークショップ
（職員、事務局）

7月

7/20 企画会議
（職員、事務局）

8月

8/9 企画会議
（アーティスト、事務局）

8/25 企画会議
（職員、事務局）

9月

9/12 **職員向けダンスワークショップ**

10月

10/7 **グループホームの利用者とのモルック交流会**

10/8 企画会議
（職員、事務局）

10/13 企画会議
（アーティスト、事務局）

10/28 企画会議
（アーティスト、職員、事務局）

11月

11/5 **さくらんぼ祭にて新人Hソケリッサ！＋西原パフォーマンス**

12月

12/20 企画会議
（アーティスト、職員、事務局）

12/24 **ダンスワークショップ《ウチュウダンス》**

職員がチラシを作成。
さくらんぼ祭で配布したり、地域の掲示板に掲示した。

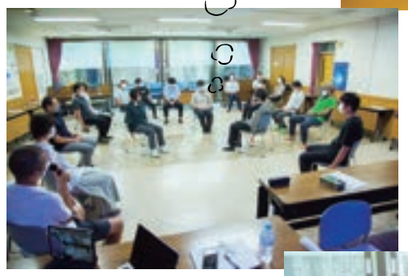
職員：挨拶ができる、困った時には助け合える関係性をつくれるようなプログラムができるといいな。

地域社会にも視野を広げ、職員全員で今年度の活動のねらいについて考える。

ツリーにはたくさんのコメントが貼られた。

職員：池袋駅周辺にはホームレスはじめ本当にいろいろな人がいるので「怖い」と感じる時もあります。どんな人たちなのか知ることも大切ですね。

なかなかこの魅力は説明しづらいなぁ。
by 担当職員



ダンスワークショップを通して、アオキの「ダンス」を職員が体験している様子。

職員向けダンスワークショップ

アオキ（アーティスト）を招き、実践も交えての活動紹介の様子。

職員：このダンスに名前をつけるなら「ウチュウダンス」かな。

紙にクレヨンで自由に線や円を描き、それを踊りにしていく。

互いに踊りを見せ合い、感じたことをシェアする様子。

施設主催のモルック大会を訪れた、アオキ率いる新人Hソケリッサ!のメンバーと西原（アーティスト）。さくらんぼ祭でのパフォーマンスについての話し合い。

モルック交流会

利用者に混ざり、アーティストたちもモルックを体験。

ほかのゲストとは気にしていることが違うみたい…（不安）
by 担当職員

新人Hソケリッサ!＋西原パフォーマンス in さくらんぼ祭

さくらんぼ祭でダンスを披露する新人Hソケリッサ!のメンバーと、自作の楽器を演奏する西原。

職員の安心・安全も大事にして全力で頑張るぞ。
by アオキ裕キ（アーティスト）

アーティストと直接ちゃんと話し合わなければ（頑張るぞ）。
by 担当職員

楽器を通じたコミュニケーションや、利用者との掛け合いも生まれた。

新人Hソケリッサ！メンバー：さくらんぼに出入りしている人たちがどんな人たちか学ぶいい機会になった。

ダンスワークショップ

ことばのイメージ
絵のイメージ
音のイメージ
で
自由におどる（うごく）

丁寧に体をほぐした後、アオキが選んだ絵を見て、それぞれが感じたことを踊りにしている様子。

西原の演奏も加わり、参加者それぞれの体から踊りが湧き上がってくる。

最後は全員で思い切り踊って、感想を伝え合った。

PROFILE

photo: Chihiro Okamoto

アオキ 裕キ（新人Hソケリッサ！代表）Aoki Yuuki

「日々生きることに向き合う身体」を求め2005年より路上生活経験者を集めダンスグループ「新人Hソケリッサ！」を開始。近年では2017-2018年東京近郊の屋外全13カ所にわたるパフォーマンス「日々荒野」ツアー、続いて2021-2022年「路上の身体祭典 H!」新人Hソケリッサ！横浜東京路上ダンスツアーを開催、屋外を中心に芸術に触れる機会のない方へ向けたパフォーマンスツアーを実施。ブラジル、リオ五輪プログラム、セレブラ「With one voice」等でも活躍。海外での評価も高い。活動を追ったドキュメンタリー映画「ダンシング・ホームレス」が2020年より全国公開された。

西原 尚　Nishihara Nao

サウンドアートやパフォーマンスなど「音」にまつわる表現活動を行うアーティスト。音をつくり出すために、身体と物と空間とどのように付き合い発展させられるのかに熱中。知らない人と会い、知らない文化や習慣に触れるために、国内外で展示やパフォーマンスを展開している。

Member's Comments　メンバーコメント

西原 尚
サウンド・アーティスト

さくらんぼの皆さんが丁寧に場所づくりに取り組んでいることが印象的でした。そこに参加することは難しいことであり、喜ばしいことでもありました。美術や音楽をつくるときも、丁寧さに丁寧さを重ねて注意深く作業をする必要があります。今回のさくらんぼでの経験を生かし、今後も良い活動を続けたい。さくらんぼの皆さんとも再び一緒に仕事ができる日を楽しみにしています。

柴田 夏実
さくらんぼ 職員

当日は司会としてプログラムに参加しました。利用者さんの緊張がだんだんと解けて、表情が柔らかくなっていく様子が印象的でした。
枠にとらわれないダンスというのが、利用者さんにとっては参加しやすかったのではないかと思いました。職員は少し恥ずかしさを拭いきれない中、生き生きと、堂々と表現している利用者さんに心揺さぶられました。アーティストが利用者のことを知る、利用者がアーティストのことを知る。どちらもあって信頼感や安心感が生まれるのかなと思いました。
このプロジェクトは、一般の人と利用者が一緒になって楽しむ場所。さらにさくらんぼのことを知ってもらえる機会になればいいと思います。

高取 さくら
さくらんぼ 職員

福祉の世界は閉鎖的になってしまいがちです。福祉×アートの組み合わせにより、どんな世界がひらけるのか？もともとアートが好きなこともあって、当初非常にワクワクしていました。しかしプロジェクト前半はお世辞にも、事務局・アーティスト・さくらんぼ職員間でのすり合わせがうまくいっていたとはいえません。さくらんぼ祭の後、あらためてそれぞれの想いや目的、役割を確認する機会を設けました。知らないことには人は不安や恐怖を抱きやすい。最初のワークショップで挙がっていたこのキーワードを思い出し、「まずはお互いを知ろう」と再出発しました。そうして今年度の集大成としての「ウチュウダンス」は大成功！アートだからこそ引き出せる利用者さんの新たな魅力や強みの発見につながりました。私たち職員も、未知への不安を乗り越えることで、多様性に対する理解を深める機会となりました。

杉田 雪絵
さくらんぼ 職員

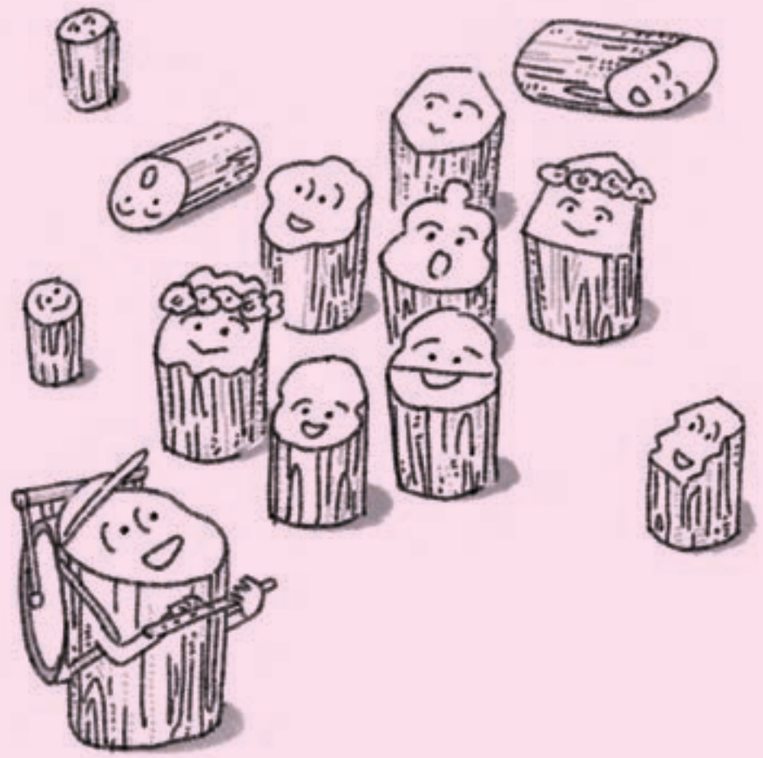
利用者の皆さんが音楽に合わせて身体を動かし、自由に表現しているのを見ました。利用者の皆さんはいつも自然体で参加されていたので、いい意味で大きな変化はなかったと思います。多くの人に集まっていただけて、本当にありがたかったですね。

アオキ 裕キ
ダンサー

今回のプログラムでは3回にわたり、職員の方や参加者にダンス（身体表現）に触れる機会、及び押し付けではない挑戦してみたくなる環境づくりとその提供を目指しました。職員の方や参加者はそれぞれ、自分自身の中から生まれた表現と出会った瞬間を目の当たりにしました。最終回での景色は全てとても素晴らしいものでした。私の稽古やワークショップでは最初に準備運動や身体表現のための導入をするのですが、2回目の我々の踊りを体感してもらった際、踊ってみたいと手を挙げた利用者の女性、最終回のメンバーの自己紹介ダンスを観て踊ってみたいと手を挙げた施設利用者の男性、お二人が準備運動や身体表現の導入もなく踊る姿は印象深かったです。施設利用者の方々は、人真似などでなく自分だけの表現をしたいと思っている方が多いと感じます。日常生活において芸術などに触れる機会の少ない施設職員の方への信用の獲得は、やはり時間を要すると感じます。アーティストとして、初めて芸術に触れる人たちこそ、心身を揺さぶる驚きは必要だと思う反面、施設職員の方が安心を求める部分との折り合いの必要性をあらためて感じました。
また、職員や参加者の表現を第三者が付度なく称えるような状況や芸術が鑑賞した誰かの需要となることが、このプロジェクト全体における成果の一つだと思います。

Comments from the secretariat　事務局コメント

理解できないのではなくて、理解しきるということがないものを、自分たちが責任を持って扱うって、どのようにすれば良いの？ そんなとっても重要な問題についてさくらんぼの方たちは真摯に向き合ってくれました。そして、「楽しませてくれるゲストとしてアーティストを招くのではなく、プロジェクトを共に考える仲間としてゲストを迎えること」へと意識の転換がありました。さらに、「多様性を受容する必要性」について頭ではわかっていても、具体的な想像力と対応力を育むのには時間がかかることを身をもって経験しながら、どうにか現場を成立させようと前向きに取組んでくださいました。その経験を共にできたことは未来に資する素晴らしい出来事だったと思います。



プロジェクトをより詳しく知りたい方は、ウェブサイトも合わせてご覧ください。
プロジェクトの過程や職員のインタビューを含んだ活動紹介動画などを掲載しています。
左記QRコードよりご覧いただけます。
https://turn-land-program.com/case_post/16sakuranbo_2023/

プレLAND

シネマ・チュプキ・タバタ

参画施設・団体

CINEMA Chupki TABATA（シネマ・チュプキ・タバタ）

シネマ・チュプキ・タバタは、さまざまな理由で、映画館に行くことをためらってしまっていたどんな人も、安心して映画を楽しめる、ひらかれた映画館として設立。音で映画をイメージする視覚に障害のある方にも届けるため、作品に最適な立体的な音場をつくっているほか、車いすスペースや親子鑑賞室を設置し、イヤホン音声ガイドや字幕付き上映を常時行っている。

プロジェクトについて

プロジェクト名

チュプキサロン

ねらい 1

視覚障害や聴覚障害のある方ともフラットに意見交換しながら、映画やアートについて、肩書きを意識せず、ゆるくつながって語り合える場をつくりたい。

平塚 千穂子（シネマ・チュプキ・タバタ 代表）

ねらい 2

サロンの濃密な議論を参加者以外の人とも共有したい。

舟之川 聖子（コーディネーター）

プロジェクト運営メンバー

石井 健介（ブラインドコミュニケーター）
平塚 千穂子（シネマ・チュプキ・タバタ 代表）
舟之川 聖子（コーディネーター）
吉川 真以（コーディネーター）
渡邉 梨恵子（TURN LANDプログラム 事務局）

ユニバーサルシアターに関心のある人々が集う対話の場

映画を楽しむすべての人にとって、シネマ・チュプキ・タバタという日本で唯一のユニバーサルシアターはどのような存在なのだろうか。普段から視覚や聴覚などに障害のある方も含め、さまざまな人たちが出入りする映画館だからこそ、これからの身近な文化施設の可能性について話し合えるのではないか。そんな考えから、月に一度、ユニバーサルシアターに関心のある人々が集い、日頃の疑問や気づきを分かち合うサロンを企画した。ミニシアターの運営者や設立準備中の起業家、映画監督や音声ガイド制作者をゲストに招く回などを含め、計7回実施した。手話通訳付きでプレゼンテーションを聞いたり、音声ガイド付きで作品を観る体験を通じて、アクセシビリティの考え方や、地域における文化芸術の担い手としての役割、映画業界や行政の果たすべき役割について意見を交わした。

PROCESS プロジェクトの動き

POINT
- 月一回、ユニバーサルシアターに関心のある人々をつなぐサロンを開催。
- 視覚障害者や聴覚障害者と一緒に作品やミニシアターの未来をつくる。

5/10 チュプキサロン vol.1

5/17 顔合わせと現状共有
（ブラインドコミュニケーター、職員、コーディネーター、事務局）

5/21 オンラインにて1回目のゲストと振り返り
（ゲスト、ブラインドコミュニケーター、職員、コーディネーター）

6/6 事務局と企画会議
（ブラインドコミュニケーター、職員、コーディネーター、事務局）

6/7 チュプキサロン vol.2

6/15 企画構想会議
トークツリー ワークショップ
（ブラインドコミュニケーター、職員、コーディネーター、事務局）

7/5 チュプキサロン vol.3

7/13 実施振り返り
（ブラインドコミュニケーター、職員、コーディネーター）

7/27 実施振り返り
（ブラインドコミュニケーター、職員、コーディネーター）

9/6 チュプキサロン vol.4

10/4 チュプキサロン vol.5

10/12 エンディングに向けた打ち合わせ
（ブラインドコミュニケーター、職員、コーディネーター）

11/8 チュプキサロン vol.6

12/6 チュプキサロン vol.7

サロンに参加しているメンバーだけでなく一般の人にも、ゲストのプレゼンテーションの内容や対話の記録をレポートにして届けたい！

コーディネーター

各回のサロンの内容をコーディネーターの舟之川がレポートにまとめ、TURN LANDプログラムのWEBサイトで公開した。
＊P45のURLから閲覧可。

5月

チュプキサロン Vol. 1
テーマ「音だけのドキュメンタリー映画の上映対話会」

ゲスト：ハブヒロシ（監督）

全編映像なし、音だけで記録したドキュメンタリー映画『音の映画 Our Sounds』（2022年）の上映会を行った。上映後は、監督のハブヒロシとのアフタートークを実施。

サロンを通じて、みんなで文化をつくることや、参加者も表現できる場をつくることに挑戦してみたい。
by 石井（ブラインドコミュニケーター）

6月

チュプキサロン Vol. 2
テーマ「鑑賞体験をふりかえる」

ゲスト：ハブヒロシ（監督）

Vol. 1 に続いてハブヒロシを招き、上映対話会の体験を参加者と共にふりかえった。話題は多岐に及び、今後のサロンに向けたテーマも生まれた。

このサロンにゴール設定はありません。出会う前と出会った後に違いが出たらいいと思うよ。
by 平塚（シネマ・チュプキ・タバタ代表）

7月

チュプキサロン Vol. 3
テーマ「なぜ、いま映画館をつくるのか」

ゲスト：今井健太
（ミニシアター設立準備中）

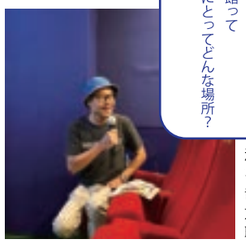
街づくりを考えていたら映画館をつくりたくなった。
by 今井（ミニシアター設立計画中）

今井（左）が大宮で設立準備を進めている、ユニバーサル上映を視野に入れたミニシアターの構想を聞いた。

チュプキサロン Vol.4
テーマ「みんなが楽しく安心して住める街を映画館から考える」

ディスカッションの様子。
Vol.3を受けて、映画館と街（およびそこに暮らす人）との関係を深く掘り下げた。

映画館って地域にとってどんな場所？



沖縄でミニシアターを経営する方と、バリアフリー字幕や音声ガイドを制作する企業の方を参加者に招き、映画館を取り巻く現状も共有した。

9月

10月

チュプキサロン Vol.5
テーマ：「ミニシアターから考える " 新しい公民館 "」

ゲスト：竹中翔子
（映画と本とパンの店「シネコヤ」店主）

ミニシアターが地域の方々や地元の福祉施設のメンバーと交流する場になって、そこから地域をつなげる企画が生まれた事例もあります。
竹中翔子（シネコヤ店主）

藤沢市で「映画と本とパンの店 シネコヤ」を経営する竹中翔子をゲストに招き、地元の福祉施設を舞台にした映画『かぐやびより』の上映がきっかけとなって地域の交流が生まれた事例などを聞いた。その後、質問や感想を共有しながら、ミニシアターの持つ「公民館」機能について深掘りした。

『かぐやびより』を監督した津村和比古（中央）と対談する竹中。

文化芸術の担い手であり、小規模なビジネスを営む身として、独自の組み合わせやつながりを強みにしながら目指す社会を描く姿勢に共感を覚えました。
by 参加者

11月

チュプキサロン Vol.6
テーマ：「ユニバーサルシアターの未来①」

最後の2回は、これまでのサロンで培った対話の土壌をベースにした、より核心に迫るテーマで締めくくろう！
by コーディネーター

「場の意義」の次は、「場の抱える問題」について考えたいと、シネマ・チュプキ・タバタ代表の平塚とスタッフの柴田笙がプレゼンターとなり、チュプキの経営面の課題を具体的な数値も示しながら説明した。

発表する平塚（左）に内容の確認を入れながら進行するファシリテーターの石井（右）。

後半は参加者も交えて、何がその課題をつくっているのか、日本でさらに常設のユニバーサルシアターが生まれるためには何が必要か等について考えた。

回を重ね、参加者同士の交流も深まり、サロン外でのコラボレーションも生まれていた。

12月

チュプキサロン Vol.7
テーマ：「ユニバーサルシアターの未来②」

ゲスト：
小笠原尚軌（日本映像翻訳アカデミー・バリアフリー事業部 ディレクター）
和田浩章（音声ガイドディスクライバー）

和田浩章と、小笠原尚軌をゲストに招き、映画配信における制作の現状と業界の今後についてや、実際に映像作品をスクリーンに投影しながら、制作上の工夫について聞いた。

シネマ・チュプキ・タバタ 外観。

それぞれの人が命を持って生きているからこそ制作や環境づくりに思いが生まれる。さまざまな困難はあるが、芯を持って、人と文化の豊かさを一緒に大事にしていきたい。
by 平塚（シネマ・チュプキ・タバタ代表）

PROFILE

photo：Shinichiro Oroku

石井 健介　Ishii Kensuke

アパレル業界を経てフリーランスの営業・PRをし、2016年の4月一夜にして視力を失うも、軽やかにしなやかに社会復帰。ダイアログ・イン・ザ・ダークでの勤務を経てブラインドコミュニケーターとしての活動をスタート。見える世界と見えない世界をポップにつなぐためのワークショップや講演活動をしている。また、頑張らない心身を整えるセラピストとしても活動。

Member's Comments　メンバーコメント

石井 健介
ブラインドコミュニケーター

サロンの初回に「映像の無い音だけの映画をろう者と一緒に楽しむためにはどうしたらいいだろう?」という好奇心から企画を立てましたが、時としてその好奇心が意図せずに暴力性を含んでしまうのだなと自覚しました。なんでもかんでも「情報保障」と称して、共有もしくは強要することは、伝わったとしてもエンターテインメント性や芸術性に欠けてしまうこともある。果たしてそれを相手が望んでいるのか? というところにまで配慮した上でユニバーサルを語るべきだなと実感するきっかけになりました。

宮島 真一
サロン参加者
（ミニシアター「シアタードーナツ・オキナワ」経営者）

みんなが映画館の社会的価値について向き合っている姿勢が凄く良かったです。チュプキのサロンには、地域の方々が自然に集まってくるような、公民館のような機能を持ってもらいたいです。

古川 耕
サロン参加者
（放送作家）

あの場所でなければ聞くことのできない話や知り合うことのなかった人たちと出会うことができ、刺激を受ける場として毎回楽しみに参加していました。また、アクセシブルなマナーで進めようとする、主に石井氏のMCぶりも素晴らしかったです。

遠藤 郁美
サロン参加者
（音声ガイド制作者）

サロンでは前触れなく自分自身が問われる瞬間もあり、刺激的でした。チュプキの持つ雰囲気のおかげで、難しいテーマもゆるやかに受け止められたと思います。街づくりの具体的なヒントもたくさん得られました。

吉川 真以
コーディネーター

チュプキ、あるいは地域の映画館、劇場などが、公共施設としても大切な機能があることをあらためて感じることができたのは成果だと思います。

舟之川 聖子
コーディネーター

回を重ねるにつれ、コーディネーターとして、作家として、このサロンで起こっていたことを社会に伝える架け橋となり、書いて記録に残すということをしなければならないという思いを強くした。

平塚 千穂子
シネマ・チュプキ・タバタ 代表

チュプキは、ただ単に見えない人も聞こえない人も鑑賞ができるようにしている映画館ではない。必要なツールや設備を使ってみることで、一般の方々の鑑賞体験もより豊かになる。いろんな人と共に観ている空間では、映画のポテンシャルも引き上げられる。そういうことを言語化していくことで、意識を「福祉」ではなく「文化」に向け、他人事ではないものにしていくことが大事だと思う。

Comments from the secretariat　事務局コメント

サロンという企画フレームを固定して回を重ねたことで、無理なく続けていける運営体制や手法をプロジェクトを進めながら探っていくことができました。また、この場が大事にしたい感覚や判断の塩梅が、当日の意見交換や振り返りの場を通じて、サロンに参加するメンバー間でも少しずつ共有されていったことも大きな成果でした。

プロジェクトをより詳しく知りたい方は、ウェブサイトも合わせてご覧ください。
プロジェクトの過程や職員のインタビューを含んだ活動紹介動画などを掲載しています。
左記QRコードよりご覧いただけます。
https://turn-land-program.com/case_post/17chupki_2023/

プレLAND

フェイト

参画施設・団体

放課後等デイサービス　フェイト

フェイトは、杉並区にある放課後等デイサービス。こどもたちのありのままを受け入れ、それぞれのこどもの学習進度、学力に合わせた学習支援や、同じような課題を抱えているこどもたちが、楽しく一緒に活動できる居場所づくりを行っている。

プロジェクトについて

プロジェクト名

オーロラ・フロア プロジェクト

ねらい 1

障害のある方と触れ合う機会がなかった人たちがこの機会を通じて彼らの魅力と出会う場にしたい。

フェイト 職員

ねらい 2

フェイトでのダンスフロア企画はダンスフロア好きな地域の人々にも知ってほしい。

大黒 健嗣（アーティスト）

プロジェクト運営メンバー

大黒 健嗣 (アーティスト)
目黒 英之、髙井 功一 (フェイト 職員)
富塚 絵美、関 マイコ (TURN LANDプログラム 事務局)

宇宙人も来るかもしれない未来のダンスフロアに向けた具体的な一歩

高円寺を拠点に地域でアート企画をコーディネートする大黒は、前年度にフェイトで開いたダンスフロアで、心赴くまま自然に踊り出すこどもたちを見て、彼らと自分が出会ってきた仲間たちを出会わせるような機会をつくり出したいと考えた。フェイトの職員たちも、地域の人々が障害のあるこどもたちに慣れていくことが一番大切なことだと考えていたので、外部の人たちとこどもたちがお互い安心した状態で出会えるダンスフロアについてアイデアを出し合うところから今年度の活動は始まった。地域の地図を見ながら、「近隣の老人ホームに出向くのはどうか?」「ライブハウスで開催したらこどもたちは踊れるか?」「公園でやったらどうだろう?」など、さまざまなアイデアを出し合いながら実現に向けて職員とアーティストが一緒に企画運営について話し合えたことで、障害のあるこどもたちとの活動における合理的な配慮についてアーティストやサポートスタッフたちが学ぶ機会となり、また職員にとっては文化的な視点に立ってあらためてこどもたちが生活をする地域について考える機会となった。こどもたちが気に入ってくれるかどうかドキドキしながらつくったオリジナルのコスチュームは、プログラム当日、こどもたちに予想以上に歓迎された。人と人として直接出会う時よりも、出会ったことのない不思議な生き物同士で音楽に身を委ねながら出会う時の方が不思議と気楽で開放感があり、気持ちの余裕を持ってその場を分かち合うことができた。

PROCESS プロジェクトの動き

POINT
- 音楽に心ひらき自然に踊るこどもたちと出会えるダンスフロア・プログラム。
- 障害の有無が誤差になるくらいスケールの大きな“多様さ”に想いを馳せる時間。

5/26 顔合わせと現状共有
（職員、事務局）

6/9 企画会議
（アーティスト、事務局）

6/12 企画構想会議
トークツリー ワークショップ
（アーティスト、職員、事務局）

7/10 企画会議
（アーティスト、職員、事務局）

9/7 企画会議
（アーティスト、事務局）

10/25 **一般大人向け事前ワークショップ**
（会場：高円寺 REN）

11/13 企画会議
（アーティスト、職員、事務局）

11/15 **ダンスフロアプログラム開催**
（会場：フェイト）
参加協力者 野口 政治、ぱちゃ、原 順子
宮口 陽子、室橋 奈緒

11/17 **ダンスフロアプログラム開催**
（会場：フェイト）
参加協力者 熊谷 楓花、ぱちゃ、日色 悠太
宮口 陽子、吉川 まさる

5月 ▶ 6月 ▶ 7月 ▶ 9月 ▶ 10月 ▶ 11月 ▶

職員：大黒さんの地域でのイベントに参加できないかな？

職員：障害のある方に慣れている人が増えることがこどもたちの生きやすい社会をつくることにつながると思う。

トークツリーワークショップの様子。

職員も２年目になり、積極的に意見を言ってくれるようになった。

宇宙人も参加できるくらい器の広い未来のダンスフロアを目指そう！
by 大黒＋職員

曲線の多い独創的な形のツリーができあがった。

大黒のアートチームによるコスチュームのスケッチ。

一般大人向け事前ワークショップ

地域の大人に向けて、プロジェクトについてプレゼンテーションを行い、本番に参加してくれる仲間を増やす「事前ワークショップ」を実施。

こどもたちお面とか嫌がるかな？衛生面の配慮はどれくらい必要かな？
by 大黒

参加者それぞれの「未来人ファッション」が生まれ、本番への準備が整った。

ダンスフロアプログラム開催

鏡や衣装を置き、部屋の一部を楽屋のように設えた。

衣装、お面、サングラス、ステッキなど事前のワークショップで制作したアイテムを並べ、こどもたちを迎えた。

これはどうかな～

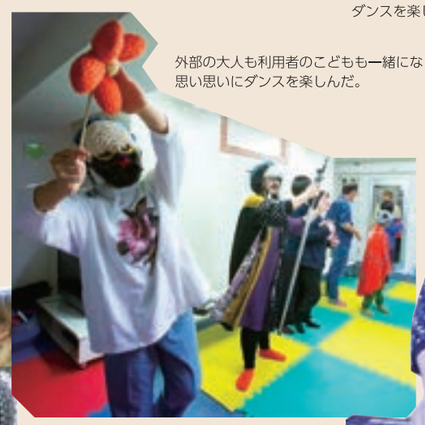
いろんな衣装を試してみたら？

ダンスフロア好きの大黒の仲間たちがこどもたちの着替えをサポート。

何度かお面や衣装をつけかえて楽しんだ。

こどもたちもイベントを楽しみにしていたので、音楽がかかり始めると、待ちきれずに動き出すこどももいました。
by 職員

ダンスを楽しむこども。


外部の大人も利用者のこどもも一緒になって、思い思いにダンスを楽しんだ。

気に入ったアイテムを身に着け、準備完了。

こどもたちが好きな曲をかける DJ 大黒。

PROFILE

大黒 健嗣　Daikoku Kenji

現代の都市を舞台にしたアートプロジェクトを通じて、あたらしい価値観やライフスタイルを提案し実践するアートプロデューサー。“ギャラリー高円寺AMPcafe”に始まり、アートホテルプロジェクト「BnAhotel」（東京、京都など4拠点で展開）や壁画(MURAL)を描くプロジェクト（高円寺、虎ノ門、中野）などを展開。「我々は宇宙人だ」という客観的事実をいかに日常的な感覚に落とし込めるかを全ての活動のテーマとしている。

Member's Comments　メンバーコメント

原 順子
参加協力者

障害を持ったこどもたちと接したことがなく、不安はありましたが、それぞれの感覚が違うのは当たり前なことだなと、考えをあらためました。

宮口 陽子
参加協力者

楽しそうに踊ってる子もいれば恥ずかしがって端っこに座ってる子もいて、無表情だけど衣装をつけたまま歩き周る子もいました。暑くても絶対にお気に入りの衣装は脱がない子がいてそれが特に可愛かった。

大黒 健嗣
アーティスト

この「オーロラ・フロア」は、通常は別モノとしてカテゴライズされる人々の垣根をなくすために貢献できると思えた。関わった人たち同士が互いに自分の生活圏に存在しているという事実が、自然と馴染んだ要因のひとつかもしれない。
本当に価値ある成果というのは、社会に自然と浸透して「当たり前」がいつのまにか変わっていることであり、このプロジェクトに関しても時間もかかるし目に見えにくいものだと思うが、自分自身と「フェイト」という施設やこどもたち、職員さんたちとの一体感を感じることができたという小さな事件が、将来を大きく変える可能性の種であり、成果だと考えている。

目黒 英之
フェイト 職員

知らない大人がいたり、いつもと違う活動室の雰囲気にも関わらず、こどもたちがスムーズに入り込み楽しんでいました。衣装・被り物にも思いのほか、怖がらず身に着けていたのが印象的でした。
当日、たまたま保護者が迎えにきていて、いつもは玄関先で引継ぎして帰られてしまうのですが、この日は短い時間ですが参加していただきました。こどもと一緒に楽しんでいただいた様子で喜んでもいました。普段、あのようなこどもの姿を見ることもないと思うので、場所と時間が許せば保護者にご参加いただくのも良いかなと思いました。

室橋 奈緒
衣装デザイン

このような場がたくさん世の中に増えていけば日常がもっと自由で豊かなものになると感じました。普段服をつくり着ていただいている方を目にした時の感覚とはまた違う、その人だけでなくその場の雰囲気もガラッと変えてしまう着装に刺激を感じました。

Comments from the secretariat　事務局コメント

最終的にフェイトでの開催となったが、こどもたちにとってどこで開催するのが一番安心・安全なのかを検討しながら自分たちが関わることのできる地域の文化資源をリサーチするような議論が職員とアーティストとの企画会議で実現していたことも、未来に資する重要な時間でした。職員がこの事業以外のアーティストの活動に関心を持ち、近隣で開催されるイベントがあれば参加の余地がないか一緒に検討できたことも、アーティストにとって、障害特性や支援可能な範囲について知る良い機会になっていたと思います。企画をプロデュースする立場であるアーティストやコーディネーターがさまざまな状況下にある障害のある方への理解を深めることは、合理的な配慮が行き届く社会の実現に向けた一歩かもしれません。

プロジェクトをより詳しく知りたい方は、ウェブサイトも合わせてご覧ください。
プロジェクトの過程や職員のインタビューを含んだ活動紹介動画などを掲載しています。
左記QRコードよりご覧いただけます。
https://turn-land-program.com/case_post/18fate_2023/

プレLAND

ほうらい地域包括支援センター

参画施設・団体

ほうらい地域包括支援センター

台東区にあるほうらい地域包括支援センターは、地域の高齢者がいきいきと安心した生活を続けられるよう、社会福祉士、主任ケアマネージャー、保健師等が相談や支援に応じる総合相談窓口。

プロジェクトについて

プロジェクト名　**バラエティ・ポコペン**

ねらい 1　地域に暮らす高齢者やその家族、地域のグループホームなどで高齢者を支える人たちとアーティストをつなぎ、アーティストと地域の人が協働する機会をつくりたい。
ほうらい地域包括支援センター 職員

ねらい 2　その日その時その路上で出会う（それが偶然でも、必然でも）人たちと（それが誰であれ、何と呼ばれる人であれ）精一杯ええ風景を存在させ続け、共に味わいたい。
きむらとしろうじんじん（アーティスト）

ねらい 3　自分を超えてそこにいる人々と踊るような時間をつくりたい。
大西 健太郎（アーティスト）

ねらい 4　不本意な実情も混じるリアリティの中に美しさを見出したい。
BARBARA DARLINg（アーティスト）

プロジェクト運営メンバー

きむらとしろうじんじん、BARBARA DARLINg 、大西 健太郎 (アーティスト)
木下 明、羽部 清久、佐伯 賢 (ほうらい地域包括支援センター 職員)
若山 萌恵 (コーディネーター)
富塚 絵美、渡邉 梨恵子 (TURN LANDプログラム 事務局)

地域の中で準備してきた表現を、路上で味わってみる日

今年度は、ほうらい地域包括支援センター（以下、ほうらい）の職員や近隣の福祉施設の方たちにもプロジェクトメンバーとして参加してもらい、一緒にプロジェクトを地域で展開させていくことができた。1年目に路上で展開するアートプログラムの本番を見てもらい、アーティストたちがやろうとしていることを経験を通して理解してもらっていたので、2年目となる今回は企画構想段階からほうらいの職員とアーティストが一緒にプロジェクトのビジョンについて意見を出し合うことができた。また、担当のほうらい職員が積極的にアートプロジェクトについてリサーチし、アーティストの活動についても詳しくなっていたので共通言語が増え、アーティストがいなくてもどんどんプロジェクトを推進していく力が身についていた。

じんじんの「野点（のだて）」を中心とした路上でのアートプログラム実践に向けた準備と並行してバーバラのアーティスティックリサーチも行ったことで、次年度に向けて新たな展開の土台づくりも進められた。また、大西の衣装を地域の方がつくるなど、本番までのプロセスで近隣の高齢者施設や福祉事業所と連携することができ、地域の人々が無理なく関われる協働の場をつくることができた。

PROCESS プロジェクトの動き

POINT
- ほうらい地域包括支援センターの職員がアーティストの活動について理解を深め、アーティストと地域の高齢者との出会いをコーディネート。
- 近隣の福祉事業所やグループホーム、大学などと連携して展開。

5月
- 5/29 顔合わせと現状共有（職員、事務局）

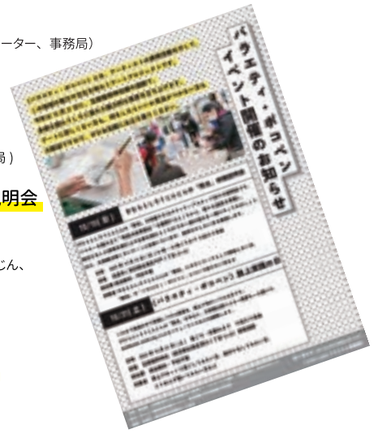
6月
- 6/29 企画構想会議 **トークツリー ワークショップ**（じんじん、バーバラ、コーディネーター、職員、事務局）

7月
- 7/10 企画会議（職員、コーディネーター、事務局）

8月
- 8/10.11 **ボランティア説明会**
- 8/12 企画会議（じんじん、大西、職員、コーディネーター、事務局）
- 8/29 **地域の方と協働制作**（大西、地域住民、コーディネーター、職員）

9月
- 9/6 リサーチ　認知症ボランティアミーティング（大西 、コーディネーター、職員）
- 9/9 地域の方と協働制作（大西、地域住民、職員、事務局）
- 9/13 運営会議（当日スタッフ、コーディネーター、事務局）
- 9/17 グループホーム訪問（大西、コーディネーター）
- 9/19 運営会議（協力施設：浅草みらいど、コーディネーター、職員、事務局）
- 9/19 運営会議（協力団体：東京藝術大学学生、コーディネーター、事務局）
- 9/27 グループホーム訪問（大西、コーディネーター）
- 9/28 運営会議（スタッフ、コーディネーター、事務局）

10月
- 10/3 運営会議（東京藝術大学学生、スタッフ、コーディネーター、事務局）
- 10/3 グループホーム訪問（大西）
- 10/8 運営会議（出店者：富田、コーディネーター、事務局）
- 10/15 **バラエティ・ポコペン体験説明会**
- 10/17 運営会議（浅草みらいど職員、出店者：金田、じんじん、コーディネーター、事務局）
- 10/18 運営会議（コーディネーター、職員、事務局）
- 10/21 **バラエティ・ポコペン本番**
- 10/24 振り返り



「課題」や「理想」に囚われないビジョン共有はできないだろうか？

トークツリーワークショップの様子。
施設の課題や成果を言葉にして整理してみる。

ほうらい職員：アーティストが求めている状況はどんなだろう？

みらいど職員：一見怪しいおじさんたちが気軽に立ち寄れるあの裏路地でやることに意義があると思います！

ボランティア説明会

プロジェクトについて説明を行い、イベント本番に向けて参加者と企画を練った。

ほうらい職員：地域の人にアーティストと出会ってほしい。

「野点（のだて）」の説明をするじんじん。

自身のプロジェクトについて説明するバーバラ。

「手レ（てれ）よむダンス」（風景をスケッチし、描かれた線描を元に踊るダンスパフォーマンス）について説明する大西。

衣装づくり

ほうらい職員(中央)の紹介で地域の方(左)との衣装づくりが始まる。

仕立てや、生地、帯についてなど相談を重ねた。

屋外に出た時の素材の見え方を確認している様子。

グループホーム訪問

グループホームを訪問し、利用者と交流する大西。

踊りも披露し、《バラエティ・ポコペン》本番も見に来てほしいと誘った。

体験説明会の開催場所探し。

体験説明会の会場下見。
「野点」のリヤカーやテントが設置できるか計測。

バラエティ・ポコペン 体験説明会

「野点」のスタッフに当日の作業について説明するじんじん。実際に使う道具をセットするところから体験。

本番の会場のレイアウトやどんな場にしたいか、スタッフや協力者とイメージ共有を入念に行う。

パフォーマンスを行う予定の出店者、協力施設も参加し、それぞれが当日行う内容についてプレゼンテーションをした。

大西のリハーサルをグループホームの方も見に来てくれた。

バラエティ・ポコペン 本番

地域の人たちとどんどんつながっていくパワーはさすがじんじんさん！ by バーバラ（アーティスト）

素焼きの茶碗に絵付けをする来場者。

茶碗の窯出しをするじんじん。

地域の福祉事業所によるうちわつくりコーナー。

先日踊りを見てくれたグループホームの方たちも顔を出してくれました！ by 大西（アーティスト）

路上で踊る大西

もしかしたら、地域にゲームを知っている海外ルーツの人もいるかも!?

バーバラはベトナムで誰もが知るゲームを路上でやってみることに。

PROFILE

きむらとしろうじんじん　Kimura Toshiro Jinjin

photo: Ayaka Umeda

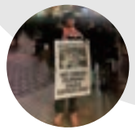
1995年から独自の「野点」を全国各地で開催。路地や空き地などで通行人や見物人も含めた一期一会を生み出すアーティスト。ドラァグクイーンの出立ちで、素焼き茶碗に絵付けをしその場で焼き上げられたお茶碗で一服できる移動式陶芸お抹茶屋台を展開する。本番の会場をみんなで選ぶ「お散歩会」や当日のボランティアスタッフたちと本番さながらに作業工程を確認する「体験説明会」など、本番までのプロセスにおける交流を大切に積み重ねながらのびやかな風景を立ち上げる。

大西 健太郎　Onishi Kentaro

photo: Ayaka Umeda

場所や人と出会う過程で生じる違和感や断絶を面白がり踊るアーティスト。どんな人がいる場所で踊るか、そこにはどんな出来事が行き交うのか、に注目し、そこにある風景を舞台にゆったりと舞う。2016年より板橋区立 小茂根福祉園にて「踊り」を立ち上げる参加型パフォーマンス〈「お」ダンス プロジェクト〉、2018年には南米エクアドルで地域住民との共同制作パフォーマンス、2020年には「サインポエム」（手話での詩の朗読表現）に着想を得たダンスパフォーマンスを展開する。

BARBARA DARLINg　（バーバラ・ダーリン）



社会において脆弱な存在にならざるを得ない人々に傾注し、そのような人々の歴史背景や権利などを調べ、その表象から人々がいかに共棲するかを考えるアーティスト。その場所や行為が持つ政治的な意味を巧みに操りながらユーモアのあるパフォーマンス作品を生み出す。

ほうらい バーバラ

もう一つのプロジェクト

「ここにいた人 / いない人の話を聞かせてください」

《バラエティ・ポコペン》と並行して、アーティストとほうらい地域包括支援センターの職員、コーディネーターは地域のリサーチにも取り組んだ。

アーティストのバーバラは、詩歌をつくりながら各地を旅する吟遊詩人のような企てをしたいと考えた。そこで、その題材を集めるために、職員に協力してもらい、地域についてのリサーチを開始した。この地域にいる人々が「どんな風景（人や出来事など）を見てきたのか」を直接聞いてまわることにした。職員も、地域の人にとって、支援員以外の存在と一緒に訪問することでどんなことが可能になるのか、関心を持って取り組んだ。

清川地区のアパートに住んでいる方に話を聞く。

もう一つのプロジェクトの動き

- 7/10 企画会議（バーバラ、コーディネーター、職員、事務局）
- 7/26 企画会議（バーバラ、コーディネーター、職員、事務局）
- 8/21 企画会議（バーバラ、コーディネーター、職員、事務局）
- 9/20 アーティスティックリサーチ①（バーバラ、コーディネーター、職員）
- 10/6 実施検討会（バーバラ、コーディネーター、事務局）
- 10/10 アーティスティックリサーチ②（バーバラ、職員、事務局）
- 11/28 振り返り（バーバラ、職員、コーディネーター、事務局）
- 12/28 企画会議（バーバラ、職員、コーディネーター、事務局）

地域の人とバーバラさんとの出会いをどうアレンジしたらいいのだろう？

ほうらい職員

どんな資料があると地域の人に声をかけやすいですか？

インタビューに向かうほうらい職員（左）、コーディネーター（中央）、バーバラ（右）

プロジェクトをより詳しく知りたい方は、ウェブサイトも合わせてご覧ください。
プロジェクトの過程や職員のインタビューを含んだ活動紹介動画などを掲載しています。
左記QRコードよりご覧いただけます。
https://turn-land-program.com/case_post/19hourai_2023/

Member's Comments メンバーコメント

ボランティア（アパート清掃員）

いろいろな人が楽しんでる印象でした。また参加したいです。

ボランティア（学生）

お客さんがお茶碗の形をじっくりと悩みながら選んでいる様子が印象的だった。また、お茶碗の絵付けの際に隣に座った初対面の方同士やスタッフと会話をしている様子がうかがえ、人々のつながりの輪が広がっているようでほっこりとした気持ちになった。

木下 明　ほうらい地域包括支援センター 職員

プログラムを通して、日頃の業務で高齢者と接していて、課題を解決する方向ばかりに向いていたことに気が付きました。話す相手がいない人にとって、人が集まる場があることが大事。違った方向で話をしたり、聞いたりすることが必要だと思いました。イベント当日は、私が担当する利用者がとても長い時間滞在してくれたのが良かった。今後は児童に関わる方々にも声をかけたい。

佐伯 賢　ほうらい地域包括支援センター 職員

地域福祉に関わる実践者として、地域課題としてよく挙がるのは、商店が少なくて買い物が不便とか、座れるところがないとか、バスが無いなどそういう視点だが、「この道は踊れるか?」という視点は新たな気づきをもたらすものであり、地域課題を考える時に予め切り捨てられている可能性に目を向けることになると思った。

清川2丁目の道路を芸術実践のために使ったということが成果だと思う。本来みんなの物である公共空間が、自らの手で使えることを示していて、公共空間をどう使いたいかを考えるきっかけになるのでは。路上をこんなふうに使うとこんな人が来てこんな場になるんだなあ、という漠とした感覚は、多分ほかの人も大なり小なり感じたのではと思い、そのような感覚を持つことは各人の日常に何か影響を与えるのではないかと思います。また、地域住民とアーティストと職員が一緒に認知症について語る機会ができたことも、今回の成果であるのかなと思います。認知するとはなんなのか、認知症は障害なのか、など認知症について再考する機会となりました。

Comments from the secretariat 事務局コメント

初年度本番を見に来た地域の福祉事業所の人々が、今回は企画の趣旨を共有する形で協働できたことが大きな成果でした。しかし、関係者が増えすぎて情報共有をするだけでもなかなか運営が大変な状況があったので、来年度はその辺りも鑑みて彼らの提案も反映できるような運営体制を考えていきたいです。本番一週間前に開催した「体験説明会」で、本番の日にアーティストが何を大事にしたいと考えているのかをしっかり共有する時間があったことが、当日臨機応変に対応できる気持ちの余裕をつくり出していました。

プレLAND

くるみの木・みかんの木

参画施設・団体

放課後等デイサービス　くるみの木・みかんの木

くるみの木・みかんの木は、杉並区にある放課後等デイサービス。養護学校や特別支援学級のこどもたちを対象に、日常生活訓練や、集団での療育を行うほか、創作的活動、作業活動などプログラムを工夫しながらのサービスを提供している。

プロジェクトについて

プロジェクト名　**サルサ大好き**

ねらい 1　こどもたちに多様な世界の魅力を紹介したい。
くるみの木・みかんの木 職員

ねらい 2　こどもたちが喜んで踊ろうとする様子を保護者とも共有したい。
くるみの木・みかんの木 職員

ねらい 3　サルサの魅力でみんなと交流したい。
パポとユミ（ミュージシャン／ダンサー）

プロジェクト運営メンバー

パポとユミ（ミュージシャン／ダンサー）
本橋 和哉（くるみの会 代表）
齊藤 果（みかんの木 施設長）
富塚 絵美、関 マイコ（TURN LAND プログラム 事務局）

サルサで通じ合う喜びを実感

今年度初めて参画した〈くるみの木〉ではサルサダンスの会を2回、昨年サルサダンスを経験している〈みかんの木〉ではキューバ人のパポとの交流会を2回開催した。〈くるみの木〉ではテンションが高くなりがちなこどももいるので楽器は持ち込まずに踊りだけの開催にした。身体が思うように動かせないこどももいるので職員たちは不安もあったが、実際にやってみるとこどもたちは音楽を通じたコミュニケーションにさまざまな形で関わろうとする積極的な姿勢も見受けられた。また、サルサと出会ったことで、サルサを習っていた職員がいることや、施設長も青春時代はダンスに夢中だったことが分かり、ダンスによってこどもも大人も新たな一面が見え関係性がほぐれた。〈みかんの木〉のパポとの交流会ではキューバのこどもがやる手遊びを教わり、みんなで盛り上がった。こどもたちがその思い出と共に時折やる「ゴリラの真似」が何の遊びか保護者にも分かるように、スペイン語の手遊び動画を職員たちとユミ（ダンサー）で制作し、その動画を保護者と共有した。

PROCESS

プロジェクトの動き

POINT

- 言語を超えて通じ合う喜びを実感。
- 普段簡単には触れられない質の高い音楽にこどもも職員も痺れた。

5/29 打ち合わせ（職員と事務局）

6/20 企画構想会議
トークツリーワークショップ
（アーティスト、職員、事務局）

7/18 企画会議（職員、事務局）

8/9 **《サルサ交流会》（みかんの木）**
8/17 **《サルサダンスワークショップ》（くるみの木）**
8/22 **《サルサダンスワークショップ》（くるみの木）**
8/23 **《サルサ交流会》（みかんの木）**

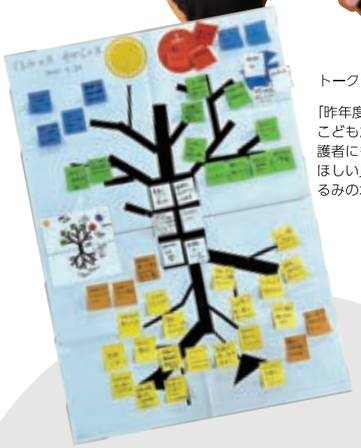
9/26 振り返りの会＋企画会議（職員、事務局）

10/1 企画会議（アーティストと事務局）

11/28 **手遊び動画撮影**

5月 ▶ 6月 ▶ 7月 ▶ 8月 ▶ 9月 ▶ 10月 ▶ 11月 ▶

くるみの木職員：視覚障害のある子にもぜひ体験させたい。



トークツリーワークショップの様子

「昨年度に続きサルサダンスを通して、こどもたちが楽しい時間を過ごし、保護者にもこどもたちの可能性を知ってほしい」という意見がみかんの木とくるみの木の両方から挙がった。

みかんの木職員：パポさんに沢山聞きたいことがあるんです！

サルサ交流会・サルサダンスワークショップ

くるみの木のこどもたちはサルサダンスを体験するのが初めてだったため、最初は緊張していたが、ユミが音楽に乗ってこどもたちや職員に接し始めると、少しずつ緊張がほぐれた様子だった。

くるみの木

職員が車椅子をリズムに合わせて揺らしたり、自立歩行できない子を抱えながら一緒にリズムに乗ったりすることで、こどもたちそれぞれが楽しめるよう工夫した。

手遊び動画撮影

バナナの着ぐるみ着てもいいですか？ by くるみの木職員

保護者にもアーティストとの活動の雰囲気を伝えるため、ユミと職員でサルサダンスの動画をつくり、自宅でも楽しんでもらえるよう工夫した。

みかんの木

「みかんの木」では普段施設にこもって活動することが多いこどもたちにできるだけ多様な経験をさせたいという想いから、キューバ出身のパポとのサルサ交流会を軸に活動を展開した。

職員やこどもたちが手づくりのウェルカムボードを用意して歓迎した。

職員がパポに「好きな音楽は何？」「キューバに手遊びはある？」など、質問をしながら、交流のきっかけをつくった。

パポに教えてもらった、キューバの手遊びを真似てみる様子。

それぞれの参加の仕方でサルサダンスを楽しんだ。「次はいつ来るの？」とこどもたちがパポに質問するなど、サルサの時間がこどもたちの楽しみになっている様子が伝わってきた。

振り返りの様子

「普段見ないこどもたちの様子が見られて良かった」など活動を通じての感想や、今後やってみたい取組についてのアイデアが職員から上がった。

PROFILE

パポとユミ　Papo & Yumi

ラテン音楽発祥の土地で培ってきた本物のサルサやジャズを魅力的な音楽とレッスンによって伝える Yanez Papo と、多様な人々がごちゃまぜになって楽しむ場をプロデュースするのが得意なパフォーマーのユミ（大久保由美）によるユニット。数々のラテン音楽、特にキューバン・ミュージックとダンスを得意としている。

Member's Comments　メンバーコメント

本橋 和哉
くるみの会 代表

音楽とダンスに目を輝かせ、笑顔にあふれたプログラムでした。こどもたちは、アーティストの陽気さとリズムの虜になっていました。汗だくになりながらも踊るこどもたちに、あらためて音楽のすばらしさを実感しています。私をはじめとするスタッフも、ノリノリで参加していました。はじけたスタッフの新たな一面もみられ、みんなの距離も縮まったように思えます。今では毎日の活動にサルサを取り入れて、楽しんでいます。こどもたちと共にスタッフもとても楽しい時間が過ごせたことに感謝しています。プロジェクトに関わっていただいた皆様、本当にどうもありがとうございました。

齊藤 果
みかんの木 施設長

サルサダンスを通して異国文化や海外出身者と初めて触れ合い、見聴きしこどもたちのみならず、スタッフも新しい世界観を実感しました。爽快感、心が楽しいと感じました。アーティストの方と関わるこどもたちの様子が回を重ねる度に変化していることに気づきました。みんな笑顔で楽しんでいました。この様なプロジェクトが無ければ知らないで終わり未経験で終わる方々が沢山いらっしゃると思います。私たちのこんな小さな施設でこの様な素晴らしい経験ができたこと、そして新たな世界を経験させてもらえたこと、私にとって児童発達支援管理責任者として最高の支援だったと思っています。

パポ
アーティスト

音楽は世界共通の言語なんだということを学んだ。こどもたちが音楽を聴くときに楽しんでいる様子を見ると、そのことを実感します。施設にちょっとした喜びをもたらすことが、このプロジェクトの成果じゃないかな。
TURN LANDプログラムを通じて、こどもたちに自分の文化の一部を教える機会を与えてくれたことに感謝しています。

ユミ
アーティスト

ラテンのリズム、音楽で施設の皆さんと楽しく踊ることができました。こどもたちも職員の方々も私たちの音楽とダンスを通じて皆で同じ感覚に浸れたのかなと思います。初めて聴く音楽や見る踊りでもなんだかワクワク嬉しい、心沸き立つ感じがするのはみんなもともとひとつだったからじゃないかしら、と思っています。

Comments from the secretariat　事務局コメント

プログラム実施後に、日常にサルサ音楽を取り入れる職員がいたり、パポと同じスピーカーを買う職員がいたり、立場を超えて関わった人のプライベートな日常にまでプログラムが浸透していたことはとても嬉しい出来事でした。また、こどもたちが知らない曲ばかりでもプログラムが成立することをしっかりと証明してくれました。質の高い音楽プログラムを提供できたことは何よりパポの実力のおかげなので本当に感謝しています。

プロジェクトをより詳しく知りたい方は、ウェブサイトも合わせてご覧ください。
プロジェクトの過程や職員のインタビューを含んだ活動紹介動画などを掲載しています。
左記QRコードよりご覧いただけます。
https://turn-land-program.com/case_post/20kuruminokimikannoki_2023/

プレLAND

西荻ふれあいの家

参画施設・団体

西荻ふれあいの家（ももの会）

認定特定非営利活動法人ももの会が運営する「西荻ふれあいの家」は、“人と人とをつなぎながら地域に根ざした福祉の街づくり”を目指す、高齢者在宅サービスセンター。NPO法人としての特長を発揮しながら、人間としての尊厳を守り、生きる喜びのあるデイサービス事業をしている。

プロジェクトについて

プロジェクト名　**イセカツ工房**

ねらい 1　いつかは近所の小学生も関われる音楽活動もやってみたい。
西荻ふれあいの家 職員

ねらい 2　ここに集う高齢者の心がときめく時間を大切にしたい。
西荻ふれあいの家 職員

ねらい 3　ここでの大切な時間を作品化する。
伊勢 克也（アーティスト）

プロジェクト運営メンバー

伊勢 克也（アーティスト）
梅谷 則子（西荻ふれあいの家 施設長）
宮 浩子（ももの会 理事）
渡邉 梨恵子（TURN LANDプログラム 事務局）

「一見無駄な、でも誰かにとって大切なこと」を分かち合うことで生まれる特別な時間

伊勢は前身のTURN事業でももの会に通った際、編み物をもの会のメンバー（利用者）たちから教わっていた。それ以来、自身の個展でも編み物の作品を発表するほどに「編む」という行為に夢中になっていた。以前交流した際にはさまざまな参加型のアートワークショップも実施したことがあり、互いの特性も理解している間柄なので、今回はあえてアートという謎めいた行為に直に触れてもらうような活動を目指し、伊勢の編み物の作品をみんなでつくることになった。お茶目で無邪気なメンバーたちからは、「なんでこんなもんつくるの〜？」と率直な感想や文句が飛び交いながらも、「こうしなければいけない」もなければ「こうなったらダメ」も無い摩訶不思議な行為に徐々に慣れてゆき、「伊勢さんと共に分かち合うアトリエの時間」に夢中になっていった。伊勢の狂気に似た理由のない内発的なエネルギーに圧倒される時もあれば、うんざりする時もある。編み物を続けるうち何をしているんだか分からなくなったり、一人で編み物をする時とは異なる魅惑的で厄介な状況に魅了されたりするうちに、心が揺れ動く何気ない戯れの尊さに、別れを惜しむ状況さえ生まれていた。編み物が苦手な人もやったことのない人も何となく参加したくなる場の魅力が、一人また一人と参加者を増やしていた。

PROCESS プロジェクトの動き

POINT
- ときめく心が場をひらく。
- 何のためにやるか分からないことだけど、だんだんその時間がクセになる。

施設のプログラムの一環で定期的に実施している俳句の会にも参加し、自作の俳句を披露。

6/19 顔合わせと現状共有（職員、事務局）

7/7 企画構想会議
トークツリー ワークショップ（職員、事務局）

7/31 企画会議（職員、事務局）

8/28 企画会議（アーティスト、職員、事務局）

9/26 企画会議（アーティスト、職員、事務局）

11/8 11/9 11/16 11/17 11/21 11/23 《イセカツ工房》を開催

12/7 12/12 12/14 12/21 《イセカツ工房》を開催

6月

西荻ふれあいの家 職員：小回りのきく活動をしています！自分たちのエネルギーが湧くような活動を！

トークツリーワークショップの様子。

オレンジ色の付箋に書かれたのは「日頃感じている課題」。「高齢者はもっと生き生きと自分らしく生きてほしい」「障害のある方がどこにでも顔を出せる地域」などの言葉が貼られた。週末に施設を解放し、地域で暮らす障害のある人とその家族が参加できる「ももふらっと」という交流の場を開催している西荻ふれあいの家ならではの課題意識が見えてきた。

7月

西荻ふれあいの家 施設長：伊勢さんが来るのを楽しみにしている方がいるんです。お願いします。

今年度の活動について話し合う伊勢さんと職員。まずは目的を定めずに編み物をする時間を積み重ねていくことに。

8月

9月

それぞれの得意なことに合わせて、担当を分担していく。

11月

そんなんつくってどうするの〜要らな〜い。by 利用者

編み方を思い出しながら、久しぶりに編み物をする人も。

編み方を相談する伊勢と利用者。

うまくできな〜い！（せっかく編んだのにほどいちゃう）by 利用者

何をどこまで編んでいいのかな？
編み目はどうしたらいいのかな？
色の切り替え場所は？
最初は不安になって毛糸をほどいてやり直している人もいた。

伊勢がホワイトボードに描いた作品のイメージ。

こ〜ゆ〜のをつくります。by 伊勢

自分で編んだ作品の魅力を伝える伊勢。

伊勢に進め方を尋ねながら回を重ねるうちに、「これでいいのね。」と気ままに色を替えたり、心の赴くままに編み進めること自体を楽しめる余裕が出てきた。

12月

私も編み物苦手だけど、やろうかな。by 利用者＋職員

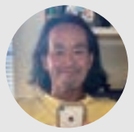
職員も利用者に寄り添いながら、一緒に編み物に参加。

伊勢が持参した編み途中の人型の作品。

伊勢が編んだ胴体部分に利用者たちが腕や脚の部分を足していった。

制作途中の作品を被る利用者。

PROFILE



伊勢 克也　Ise Katsuya

自然／人工物／メディア空間等さまざまな環境で発生し存在するモノやイメージが形づくる形態をテーマに作品を制作し、さまざまなワークショップも行っているアーティスト。高齢者が大好きで、西荻にある高齢者在宅サービス「西荻ふれあいの家」で編み物に邂逅、以後フリースタイルニッターとしても活動している。

Member's Comments　メンバーコメント

西荻ふれあいの家 利用者

仕事にならないけど指示をもらってやっている。楽しい。

西荻ふれあいの家 利用者

懐かしい。かぎ針編みやりたい。

西荻ふれあいの家 利用者

いい加減にやるのが難しい。

梅谷 則子

西荻ふれあいの家 施設長

利用者とアーティスト、利用者と事務局スタッフさんが新しい関係を結び、来訪を楽しみにしている。またリハビリも兼ね、精神的な活性化につながっていると思う。普段、積極的に手工芸に参加しない人が張り切って編み物をしていたり、いつもの活動では見ることのできない表情や特技を発揮されることがある。利用者の皆さんの楽しんでいる姿を見て、スタートはいつからでもできると感じた。

伊勢 克也

アーティスト

西荻ふれあいの家での時間は心地よい。毎回「なんか変なお兄ちゃんがいるよ」と不思議そうな顔で見られたりするんだけど、そんなの気にしないでいきなり懐に飛び込んで甘えたりするのはこれまで生きてくる中で身につけた術。なんとなくおしゃべりしてオヤツをご馳走になって帰る頃には「名残惜しいわ♡」なんて。
で、そんなことを繰り返していると「あら〜、あのお兄ちゃん今日はいないのかしら…」となる。この一連を僕は〈座敷わらし化〉と呼んでいる。という話は置いといて、今回僕は妙齢な高齢のご婦人方を丸めこんで自らの作品をつくらせようとしているんですが、その企みが堪らなく素敵なひと時をつくり出しているんですよ。皆さん心置きなく少女となる時間です。みなさん妙齢な高齢の少女です。その場は、愛と優しさと可愛らしさに満たされた秘密の花園です。あー、もう文字数が…詳しくはまたどこかで。
最後に84歳のご婦人がつくった俳句を。「冬晴るる 少女の頃の 歌うたう」。

Comments from the secretariat　事務局コメント

ももの会の方たちは、職員の方も利用者の方もいつ来てもいいよ、といった態度でアーティストや事務局スタッフを迎えてくれ、利用者との距離感が分からない時やその場でどうしたらいいか分からない時にはすぐにサポートしてくださいました。参加しなくてもいい、なんでもない時間だけれど、伊勢さんはその作業の魅力を伝え続けるし、毎回利用者の方が充実した関わりができるように細かな準備をしてきてくれていました。そのぶっきらぼうな気さくさと利用者に対する繊細な配慮が関わる人々の心をほぐしていました。参加する方は女性が多いのです。なんとなくみんな少女のような表情で、時に秘めた思いに照れてみたり、会えない時間にさまざまな方法で思いを形にしてみたりして、恋する乙女（利用者）とその親友（職員）とのプロジェクトが別で進んでいたりしたのも印象的でした。心がリラックスした状態で他者を歓迎する態度自体が、外部の人との交流を促すのだと学びました。

昨年10月にコロナ禍を経て、伊勢さんがふれあいの家に戻ってきてくださいました。

ヘンテコな、いや、芸術的な編み物の人形(人型?)と共に。

それを伊勢さんLOVE♡満面の笑みで大歓迎のTさんと、なんとなく覚えている何人かと全くわすれてしまって新鮮な感覚のほとんどのお年寄りがお迎えしました。

初めての方は、すぐに、ちょっと風変わりな若者(平均年齢89.3才の皆様にとっては、60代もこどもです)に興味津々。

かくして、伊勢さんの編み物プロジェクトは始まりました。

元々、伊勢さんが編み物を覚えたのは、このふれあいの家でのこと。それで、魅力に取り憑かれて?芸術作品をつくり上げた伊勢さんは素晴らしいと思いますが、ふれあいの家にとっては、逆輸入といってもいいのではないかと。

編み物は女性のお年寄りにとっては、昔取った杵柄です。

最初に飛びついたのは、こどもの頃から兄弟の洋服まで編んでいたというSさん。すぐに伊勢さんの編みかけをどんどん編み進め、伊勢さんが「この子はすごい。弟子第一号にしよう!」と。

初めは「目が悪い」とか「手が痛い」とか言ってやらなかった方々も、編み針を持てば、手が覚えているようで、少しずつ、編み進めています。

伊勢さんは、積極的に編むように勧めているわけではないのですが、何となく、おしゃべりをしながらその気にさせて、お仲間が増えていっています。

こうして、《イセカツ工房》誕生しました。まだ、何をつくっているかも分からず、取りあえず、手を動かしている状態ですが、親方イセカツについていけば、きっと、素晴らしい芸術作品を弟子たちがつくってくれるのだろうとスタッフは期待しております。

今後も、よろしくお願いします。

西荻ふれあいの家職員より

プロジェクトをより詳しく知りたい方は、ウェブサイトも合わせてご覧ください。
プロジェクトの過程や職員のインタビューを含んだ活動紹介動画などを掲載しています。
左記QRコードよりご覧いただけます。
https://turn-land-program.com/case_post/21momonokai_2023/

プレLAND

ロートこどもみらい財団

参画施設・団体

ロートこどもみらい財団

ロートこどもみらい財団は、現在の教育制度の下で力を発揮しづらいこどもたちのためにコミュニティづくりやアイデア実現に向けた助成金、メンタリングを支援するほか、実践的な学びによってあらゆる領域の専門家や技術に触れ、自身のスキルやアイデアを磨けるようなプログラムの提供を行っている。

プロジェクトについて

プロジェクト名	nonotone（ノノトーン）
ねらい 1	音楽が苦手なこどもたちも楽しめるような作曲プログラムをしたい。 ロートこどもみらい財団 職員
ねらい 2	こどもたちに作曲家になってもらい、自分が抱いたイメージについて演奏家とやりとりをする喜びを一緒に体験したい。 井川 丹（アーティスト）

プロジェクト運命メンバー

井川 丹（アーティスト）
荒木 健史（ロートこどもみらい財団 代表）
富塚 絵美、渡邉 梨恵子（TURN LANDプログラム 事務局）

作曲家になってみよう
～自分が抱いたイメージを「楽譜」にしてコミュニケーション～

音楽の苦手なこどもたちも楽しめる音楽づくりワークショップみたいなものはできないか？ロートこどもみらい財団の荒木は、こどもたちにオンラインを通じて未知の世界に関心を持ってもらえるような、あるいはこどもたちの潜在的な能力を引き出すような音楽プログラムを求めていた。そこで事務局が作曲家の井川に声をかけ、五線譜などで学ぶような西洋音楽の基礎知識が理解できなくてもできる作曲プログラムの考案を依頼した。そして何度も試作を重ねてついに「nonotone（ノノトーン）」という誰もが作曲を楽しめる「楽譜キット」が完成し、対面開催とオンライン開催の計2回のプログラムを実施した。レストランのメニュー表やスケジュール帳も「楽譜になりうる」というあまりにも柔軟でスケールの大きな「楽譜」のイメージをこどもたちと共有するところから始め、こどもたちの抱いた内なるイメージをプロの歌い手や演奏家たちと共有し意見交換をしながら共につくり上げる音楽を、その場にいる参加者たちと分かち合う貴重な体験を実現した。

PROCESS プロジェクトの動き

POINT
- 音楽の基礎知識がなくても作曲の醍醐味を体験できるプログラム。
- 現在の教育制度の下で力を発揮しづらいこどもたちが専門家と対等に関われる共創の場。

6/6 顔合わせと現状共有
（職員、事務局）

7/3 企画会議
（アーティスト、事務局）

7/13 企画構想会議
トークツリー ワークショップ
（アーティスト、職員、事務局）

7/24 企画会議
（アーティスト、事務局）

8/7 企画会議
（アーティスト、職員、事務局）

10/14 企画会議・会場下見
（アーティスト、協力者、事務局）

10/16 運営会議
（アーティスト、協力者、事務局）

11/19 対面プログラム：
楽譜づくり＆作曲家体験ワークショップ

ゲスト
- 池田 翔（録音・音響）
- 大西 健太郎（ダンサー・パフォーマンスアーティスト）
- 田口 喬大（録音・音響）
- 中田 真由美（声あそび表現家）
- 袴田 容（チェロ奏者）
- 若鍋 久美子（打楽器奏者）
- 渡邉 智美（声楽家・俳優）

12/18 オンラインプログラム：
楽譜づくり＆作曲家体験ワークショップ

ゲスト
- Eri Liao(シンガー)
- 坂本 裕司 (映像作家)
- 田口 喬大（録音・音響）
- 田中 文久 (作曲家・ソニフィケーションアーティスト・サウンドプログラマー)
- ファルコン (ギタリスト・作曲家)

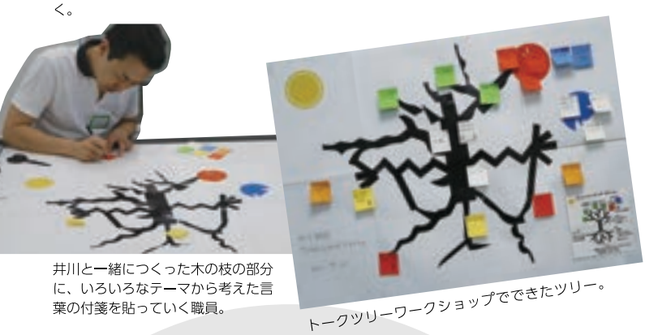
6月

トークツリーワークショップの様子。どのような体験をこどもたちに提供できたらいいか、企画についてアーティストと一緒にアイデアを具体化していく。

絶滅危惧種のラッコのように社会状況の変化によって存在しづらい状況にある人々に働きかけていきたい。
by ロートこどもみらい財団

7月

「ノノトーン」楽譜キット作成案。



井川と一緒につくった木の枝の部分に、いろいろなテーマから考えた言葉の付箋を貼っていく職員。

トークツリーワークショップでできたツリー。

8月

会場候補地の下見。

普通の演奏会でもないし、よくあるzoom配信でもないので、プログラムに合う会場がなかなか見つからない。
by 事務局

10月

楽譜キットについて説明をする井川。

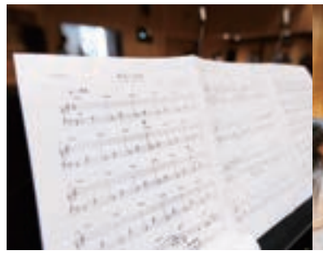
一緒に手や体を動かしながらイメージをふくらませて、音の周りでみんなで遊んでみよう！
by 井川

楽譜キットを使って作曲する様子。あらかじめ黒い5本線が引いてある台紙に、大きさも色もさまざまなシールを貼ったり、マジックペンで思い思いの線や形を描き足していく。

音のイメージを演奏者に伝えているところ。

11月

楽譜づくり＆作曲家体験ワークショップ　対面プログラム



井川がこの日のために作曲した「メローのうた～みらいのめ～」の演奏でプログラムがはじまった。

プログラムの導入。
（井川がつくった楽譜を広げて紹介する様子）

楽譜にもいろいろな表現の仕方がある。

自分のつくった曲をパーカッション奏者と一緒に演奏。

つくった曲を歌ってもらう様子。

ダンサーと一緒に体で音楽を表現する様子。

井川が相談をサポート。

みんながつくった曲を一つにつないで鑑賞。

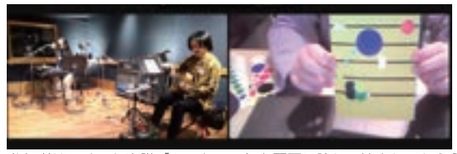
12月

楽譜づくり＆作曲家体験ワークショップ　オンラインプログラム

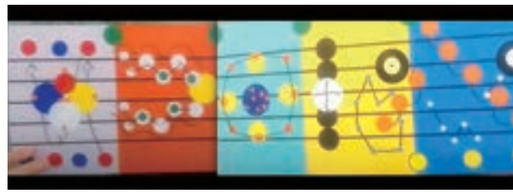
こどもたちからのコメントや質問が盛り上がりすぎて時間が足りない！放課後の時間も濃密すぎて時間延長。

井川とゲストはスタジオから参加。

参加者にはあらかじめ楽譜キットを郵送した。



参加者はつくった楽譜「ノノトーン」を画面に映して演奏してもらう。



「ノノトーン」を使ってイメージを形にし、試演を繰り返しながら少しずつイメージを共有した。

PROFILE

photo: Yuji Sakamoto

井川 丹　Ikawa Akashi

「人の声」を創作の中心に据え、表現活動を行うアーティスト。演奏会用作品やサウンドインスタレーションの制作をはじめ、美術家、建築家、ダンサー、映像作家等との共同制作やパフォーマンスなど幅広い活動を展開する。近年はアートプロジェクトへの参加や、市民参加型ワークショップ、こども創作教室のプログラム開発等を通して、音を介した表現／コミュニケーションを拡張させ、そこに居合わせた人が多様な関わり方のできる場づくりを探求している。

Member's Comments　メンバーコメント

荒木 健史
ロートこどもみらい財団 職員

プログラムでは、家庭や学校では見せない表情などがあったと保護者からお伺いしました。
アートの力で自分たちでも気が付いていない好きを発見できるのだな、と気が付きました。

Eri Liao
シンガー

こどもたちのZoom上でのコミュニケーションのなめらかさ。まるでオンラインとか対面とかそういう分け方ではないようで、存在しているという意味で全てひとつながりであることに感動しました。

中田 真由美
声あそび表現家

私のコーナーでは、譜面をつくった本人に指で譜面をなぞりながら指揮してもらう方法を見い出しました。それに合わせて、私と別の女の子と2人で、声を出して表現してみる新たな遊びもできて、とても面白かったです。ほかの人が書いた譜面を表現する体験をさせてあげられたことも、とても嬉しく思います。

ファルコン
ギタリスト・作曲家

「楽譜はコミュニケーションのツールである」という視点と楽譜の起源の紹介から始まったことで「元々は音楽は自由な発想から始まって、そのイメージを伝えるために楽譜が存在する」ということが理解しやすくなっていました。具体的な音の指示ではなくイメージを伝えるところから入ることによってこどもたちのイメージが広がっていった感覚もありました。どちらも物怖じせずに表現しようとすると、響き合うことができるんだなぁと感じました。とてもいい機会をありがとうございました。

田中 文久
音響・録音担当
（作曲家・ソニフィケーションアーティスト・サウンドプログラマー）

こどもたちが自主的・積極的に次々と、鳴る音を想像しながらノノトーン（シールや絵で表現するカラフルなオリジナル楽譜）をつくっていたのが感動的でした。曲想だけでなく音色に関するヴィジョンがある人も何人もいたのがさらに驚きでした。それを使って演奏家としっかりコミュニケーションできていたのも印象的でした。

田口 喬大
音響・録音サポート

こどもたちの自由なアウトプットが行われ、また受け入れられる機会として当人たちも存分にその場を活用できていたのが感じられました。

坂本 裕司
配信カメラ担当
（映像作家）

自ら音でアプローチし、現場の演奏者を巻き込もうとするスタンスのこどもがいたことはとても興味深かった。

Comments from the secretariat　事務局コメント

ロートこどもみらい財団の方が前年度の経験から本事業の特性を理解し、ロートこどもみらい財団の事業に登録しているこどもたち以外の方に参加を呼びかけてくれたことは大きな成果でした。こどもたちにとってその場が単なる学びの場ではなく、こどもたちが自分の意思でそこに居合わせた大人やほかの参加者と出会い、一人一人が内発的なイメージを表現することで一人一人と関係性を築き、自らの積極的な行為によって自分の居場所をつくり出す経験をできる場になっていました。

Member's Comments　メンバーコメント

井川 丹
アーティスト

対面プログラムの際、講師やゲストに対しての投げかけ、楽器の演奏といった形では参加していたものの、ノノトーンづくりには手を付けない子がいました。活動の終盤になり、見かねた保護者が手を貸す形で、シール貼りを促してくださいました。すると、それが本人の意にそぐわなかったようで、みるみる顔が曇ってしまいました。恐らくシール貼りをしていなかったのには本人なりの意図や理由があったのだと思います。一連のやりとりを見ていた大西さんは袴田さんを巻き込んで、その子と3人で作戦会議を始めました。私は各々のやり方で楽しんでくれればそれでいいと考えていましたが、大西さんは敢えてそこから一歩踏み込んで、自分の楽譜をつくることやそれが音になる喜びがその先にあることを伝えようと、その子とプログラムとの接点を探りつづけてくれました。その甲斐あって途中からものすごい集中力を発揮し取り組んでいた姿が印象に残っています。活動終了後に、その子と袴田さんがまだ熱心にやりとりを重ねる横で、大西さんが保護者と「自分のやりたいイメージやこだわりをはっきりと持っている、だからこそそれを表現するのに時間がかかってしまうのだと思う」とお話しされていた光景が、この日のハイライトの一つです。
「自由を認めることと放任することとを履き違えないようにすること」。これは、これまでもこどもと接する上で大切にしてきたことですが、そのさじ加減に正解がないことを再認識しました。こどもを前に理解のある大人を演じていないか？常に問い続けようと思いました。

渡邉 智美
声楽家

一人の人間と一人の人間のあいだで音楽が生まれる、その瞬間に立ち会えて嬉しく、楽しかったです。声と声が合わさった時のおもしろさは、きっと参加者さんも感じてくれていたのでは？と、バイバイした時の表情から想像しています。

袴田 容
チェロ奏者

こどもたちの生き生きとした表情、すごく印象的でした。アーティストに対し、活発にアプローチする子、奥手ながらも頑張って自分のイメージを伝えようとする子……こどもが持つ可能性とそれを正しい形でサポートする必要性を、とても切実に感じました。私が答える一言や一音が、彼らの人生にほんの少しでも良い刺激を与えられたならば、演奏家として最上の喜びです。

プロジェクトをより詳しく知りたい方は、ウェブサイトも合わせてご覧ください。
プロジェクトの過程や職員のインタビューを含んだ活動紹介動画などを掲載しています。
左記QRコードよりご覧いただけます。
https://turn-land-program.com/case_post/22rohto_2023/

https://turn-land-program.com/

オンラインで楽しむTURN LANDプログラム

TURN LANDプログラムの活動の記録を公開。
施設やプロジェクトの様子が楽しめる動画や、
アーティストのプロフィール等も紹介しています。

主　催　　東京都、公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京、
一般社団法人 谷中のおかって

TURN LANDプログラム 2023活動記録

2024（令和6）年3月20日

企　画　　公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京

制　作・編　集　　一般社団法人 谷中のおかって

写　真　　梅田 彩華、小野 悠介、冨田 了平、ほかスタッフ関係者

デザイン　林 よしえ

イラスト　宮田 篤

印　刷　　恵友印刷株式会社

発　行　　公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京
〒102-0073 東京都千代田区九段北4丁目1-28
九段ファーストプレイス5階
TEL 03-6256-8435　FAX 03-6256-8829
https://www.artscouncil-tokyo.jp

※営利・非営利を問わず、当資料のコンテンツを許可なく複製、転用、販売など二次利用することを禁じます。

東京都

ARTS COUNCIL TOKYO